

甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園

東山南(B)遺跡

HIGASHIYAMAMINAMI(B) SITE

1991.3

山梨県教育委員会

甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園

東山南(B)遺跡

HIGASHIYAMAMINAMI (B) SITE

1991. 3

山梨県教育委員会

序

甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園は1968年に構想が打ち出され、1973年にこの地域に建設が決定されて以来、文化庁と建設省の補助を受けて、1976年度より買収を開始し、1983年度より整備事業に着手いたしました。この間、100基を越える多数の方形周溝墓群が発見されて有名となった上の平遺跡や、銀象嵌の大刀が出土した稻荷塚古墳の調査など、区域内でも最も標高の高い、東山の平坦面の調査が進められ、この結果、甲斐国だけでなく東日本の古代史研究にも影響を与えるような遺跡が発見されております。まさに甲斐風土記の丘にふさわしい地域であることが、事實をもって証明されたと言えます。

今回の東山南（B）遺跡は、公園の多目的広場の整備に伴って発掘調査を実施した遺跡で、1989年度と1990年度の2カ年にわたって行いました。調査区から弥生時代の住居址1軒、古墳時代中頃の低墳丘円墳2基と竪穴造構1基、そのほか性格不明の溝と土坑が発見されました。調査当初は、台帳に記載された既知の遺跡が存在しなかったので、確認調査だけの予定でしたが、予想外の2基の古墳の発見は大きな収穫でした。

この古墳は、出土した須恵器から5世紀後半に築造されたものであることが判りましたが、その須恵器が県内でも最古の須恵器に属すること、須恵器の把手付椀や樽型鏡が県内初見のものであること、古墳の盛り土が低く、周囲に溝が巡る低墳丘円墳で、1号墳は3カ所、2号墳は5カ所に土橋（ブリッジ）をもっていること、などの特徴ある古墳であります。

また、公園内にある同時期のかんかん塚（茶塚）古墳が、竪穴石室をもつ円墳で、石室内部から馬具や武器・甲冑などが出土し、被葬者が畿内王權との結び付きを強く感じさせるのに比べ、東山南（B）1号墳・2号墳は埋葬主体部も既に削平されて明らかではありませんが、石室があったとは考えられないなど、その築造方法に大きな差が感じられます。この差が地域の有力豪族の階級的な差を示しているのかは明らかではありませんが、一方の東山南古墳群が上の平遺跡の方形周溝墓群のある東山台地上に位置し、かんかん塚（茶塚）古墳は畿内の色彩の強い銚子塚古墳や丸山塚古墳などのある東山北側の山裾に位置するなど、両者を対比する大きな特徴が認められます。これらの提起する考古学や古代史上の問題は、今後の周辺調査と併せて検討されなければならないものであります。

今回の調査によって、このような重要な遺跡が発見され、しかも公園の中に保存できる意義は大きいと存じます。本書を学習や研究の資料としてご利用下さいますよう念じてやみません。なお、末筆ながら本調査にご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1991年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

目 次

序

目次

例言

第Ⅰ章 環 境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歷史的環境	1
第Ⅱ章 発掘調査經過	3
第1節 調査日程	3
第1年次	3
第2年次	3
第2節 調査組織	4
第3節 調査方法	4
第Ⅲ章 造構と遺物	7
第1節 1号住居址	7
第2節 古 墳	11
第3節 1号墳	13
第4節 2号墳	18
第5節 積穴造構	27
第Ⅳ章 考 察	29
第1節 造 構	29
(1) 住居址	29
(2) 1号墳・2号墳	29
第2節 遺 物	31
(1) 弥生土器	31
(2) 須恵器	31
まとめ	33

挿図目次

第1図 遺跡位置図（1）	2
第2図 遺跡位置図（2）	2
第3図 東山南遺跡全体図	5～6
第4図 1号住居址全体図	8
第5図 1号住居址出土遺物（1）	9
第6図 1号住居址出土遺物（2）	10
第7図 1・2号墳発掘調査前現況図	11
第8図 1・2号墳全体図	12
第9図 1号墳・墳丘トレンチ・セクション、遺物出土位置図（1）	14
第10図 1号墳・遺物出土位置図（2）、周溝セクション・エレベーション	15
第11図 1号墳出土遺物（1）	16
第12図 1号墳出土遺物（2）	17
第13図 2号墳平面図・周溝エレベーション	19
第14図 2号墳周溝2遺物出土位置図（1）	20
第15図 2号墳セクション	21～22
第16図 2号墳遺物出土位置図（2）	23
第17図 2号墳出土遺物（1）	24
第18図 2号墳出土遺物（2）	25
第19図 2号墳出土遺物（3）	26
第20図 墓穴遺構	27
第21図 1号墳・2号墳出土石器	28

図版目次

図版 1 発掘調査前	図版 8 2号墳周溝4遺物出土状態
1号住居址調査風景	2号墳須恵器甕出土状態（周溝4）
1号住居址遺物出土状態	2号墳須恵器甕出土状態（周溝4）
図版 2 1号住居址遺物出土状態	図版 9 竪穴造構全景
1号住居址遺物出土状態	竪穴造構全景
1号住居址全景	竪穴造構遺物出土状態
図版 3 1号墳調査風景	図版10 1989年度調査終了写真
1号墳墳丘	1990年度調査終了写真
1号墳把手付鉢出土状態（周溝1）	1号墳全景
図版 4 1号墳周溝1セクション	図版11 1号墳2号墳全景
1号墳周溝2セクション	2号墳全景
1号墳有孔砥石出土状態（周溝1）	図版12 1号墳周溝冠水状況
1号墳周溝1遺物出土状態	大丸山古墳
図版 5 1号墳周溝1遺物出土状態	1号溝及び土坑
1号墳周溝2遺物出土状態	図版13 航空写真
1号墳周溝3遺物出土状態	図版14 1号住居址出土遺物
図版 6 2号墳周溝3セクション	図版15 1号墳出土遺物
2号墳周溝4セクション	図版16 2号墳出土遺物
2号墳櫛型甌出土状態（周溝2）	
図版 7 2号墳調査風景	
2号墳櫛型甌出土状態（周溝2）	
2号墳周溝1遺物出土状態	

例　　言

1. 本報告書は、甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園整備に先立って、1989・1990年度に行った東山南（B）遺跡の発掘調査報告書である。東山南（A）遺跡は風土記の丘研修センター北側の遺跡で、1981年に県教育委員会で調査している。
2. 本報告書は、末木 健、早川典孝が編集・執筆した。第Ⅰ章～第Ⅱ章は早川、第Ⅲ章は末木・早川、第Ⅳ章は末木が執筆した。
3. 写真撮影は末木 健、早川典孝が行った。
4. 調査の図面・写真・遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

第Ⅰ章 環 境

第1節 地理的環境

東山南遺跡は、東八代郡中道町下向山字東山に所在する。そこは、曾根丘陵を形成する舌状台地の一つ、東山の山頂部にあたる。

曾根丘陵は、富士北麓と甲府盆地を分断する御坂山塊の北方で、甲府盆地の南西縁に占地している。それは、坊ヶ峰・東山・米倉山などの台地によって構成され、東西約 12.5 km、南北約 3 km を測る。東山は、その中央部に位置し、瀧戸川と間門川に挟まれた、標高 340.2 m の台地である。急傾斜するその北側には、多くの古墳が存在し、標高 255 m の低地を経て、笛吹川左岸に達する。また、南側は上の平遺跡を介し、緩やかな傾斜をなして下っていく。JR 甲府駅から、南々東に約 8.5 km の場所にあるこの一帯は、「甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園」として、県が整備を進めている地域である。

東山南(B)遺跡は、東山の最高地点より東側にある。幅広い平坦面が次第に狭くなり、馬の背状の尾根になった所であるが、その先端部に 2 基の古墳が築造されていた。周辺の古墳を眼下に見おろす位置にあるため、造営の当初その古墳は、四方から際立って見えたものと思われる。

第2節 歴史的環境

東山南遺跡の周辺地域における人類の足跡は、先土器時代の米倉山遺跡や立石遺跡を、その初源とする。そして、これに続く繩文時代には、上の平遺跡や城の越遺跡など、弥生時代には、米倉山遺跡や女沢遺跡などの存在が知られる。このことから、曾根丘陵が古代甲斐国の政治的中心地となる以前から、人類の生活に適した地域であったことは、明らかである。しかし、曾根丘陵が、甲斐国内で傑出した様相を呈するのは、弥生時代後期からのことであった。

120 基以上もの方形周溝墓を検出した上の平遺跡は、その画期を示すものである。但し現状では、ここに埋葬された人々が、いかなる階層の者であったか、明らかになっているとは言い難い。だが、それらの人々の一部が、上述した弥生時代の遺跡や東山南・北遺跡の住人であったとしても、大過ないであろう。そして、4世紀後半頃から、東山を中心として、巨大古墳の築造期に入る。米倉山の中腹に占地する小平沢古墳は、県内で唯一の前方後方墳で、最初の巨大古墳でもある。それから、あまり時を経ずして、東山中腹の大丸山古墳・北麓の傾斜変換線付近にある銚子塚古墳や丸山塚古墳が出現する。これらの古墳の被葬者は、畿内から移入した勢力者あるいは地方豪族の有力者であったと推定されている。この後、古墳の築造は、八代町や御坂町をはじめとして、県内全域に広がっていくことになる。

そして、5世紀後半になると、東山から巨大古墳は姿を消し、経済的実力を備えた小規模古墳が、見られるようになった。かんかん塚(茶塚)古墳は、その典型であり、副葬品中の馬具から、5世紀後半の築造とするのが、一般的の見解である。また、6世紀になると、横穴式石室

をもつ古墳が現れる。考古博物館構内古墳や稻荷塚古墳などが、それに該当する。規模こそ姥塚古墳などには及ばないものの、副葬品を見る限り、ある程度の政治的・経済的実力をもっていたことは、想像に難くない。

奈良・平安時代の大きな遺跡は、東山では発見されていない。ただ『倭名抄』によって、この地域が、八代郡白井郷あるいは沼尾郷に属していたことを推定するのみである。



第1図 遺跡位置図(1)

古 墓 一 覧 表	
1 東山南1号墳	11 天神山古墳
2 東山南2号墳	12 藤塚古墳
3 大丸山古墳	13 三星院古墳
4 稲荷塚古墳	14 王塚古墳
5 銚子塚古墳	15 天神山塚古墳
6 丸山塚古墳	16 馬乗山1号墳
7 かんかん塚(茶塚)古墳	(八乙女塚古墳)
8 考古博物館構内古墳	17 馬乗山2号墳
9 小平沢古墳	18 文珠古墳
10 金塚古墳	19 八乙女塚古墳 (表門神社古墳)



第2図 遺跡位置図(2)

第 II 章 発掘調査経過

第 1 節 調査日程

第 1 年次

1989. 4. 19 発掘通知を提出。
5. 11 発掘調査開始。重機により表土剥ぎ（～5. 12）。
5. 15 表土清掃（～5. 22）。
5. 22 重機により古墳周辺の表土を除去（～5. 25）。
5. 29 1号住居址掘り下げ着手。
6. 2 1号住居址実測。
6. 7 1号住居址のセクショベルトを除去し、写真撮影。
6. 8 1号墳周溝掘り下げ着手。
6. 14 1号墳周溝1より、土師器片出土。
6. 21 1号墳周溝1より、須恵器片出土。
7. 6 壊穴遺構掘り下げ着手。
7. 12 2号墳周溝掘り下げ着手。
7. 14 1号墳墳丘部にトレーニチを設定。
7. 17 1号墳墳丘部トレーニチ掘り下げ着手。
7. 19 壊穴遺構実測。
7. 20 発掘調査終了。
8. 1 遺物の発見通知を提出。

第 2 年次

1990. 4. 26 発掘通知を提出。
8. 23 発掘調査開始。除草作業（～8. 27）。
8. 28 2号墳周溝掘り下げ着手。
9. 3 重機により抜根作業（～9. 4）。
9. 5 2号墳周溝2より、須恵器片出土。
9. 6 1号墳北側周溝掘り下げ着手。
9. 11 重機により表土剥ぎ（～9. 12）。
10. 2 2号墳周溝4より、土師器・須恵器片多数出土。
10. 4 1号墳実測（～10. 5）。
10. 9 2号墳墳丘部にトレーニチを設定し、掘り下げ着手。
10. 19 2号墳実測（～10. 22）。
10. 23 全体写真撮影。

10. 26 発掘調査終了。
11. 7 遺物の発見通知を提出。

第2節 調査組織

第1年次

- 調査担当者 末木 健、小林広和（山梨県埋蔵文化財センター）
作業員 石原はつ子、宇野和子、小林よ志子、出月多津子、塩島富美子、岩沢美奈子、宇野文子、田中弘子、矢崎悦子、梅林はなの、長田くみ子、弦間千鶴、野中はるみ、若林初美、窪田妙子、長田可祝、塩島博夫
整理作業員 長田くみ子、弦間千鶴、野中はるみ、塩島博夫、内藤真千子、山路宏美、雨宮穂波、宮沢直子、伊林佳子

第2年次

- 調査担当者 末木 健、早川典孝（山梨県埋蔵文化財センター）
作業員 石原はつ子、宇野和子、小林よ志子、出月多津子、塩島富美子、岩沢美奈子、土屋ふじ子、米山八重子、宮坂晴幸、平美与枝、中込よしひ、矢崎米子
整理作業員 宇野和子、小林よ志子、出月多津子、塩島富美子、土屋ふじ子、米山八重子、宮坂晴幸、平美与枝、中込よしひ、矢崎米子、梅林はなの、長田可祝、出月満寿江、長田和子、長田明美、出月道龟子、名取洋子、保坂典子、平重藏、長田くみ子

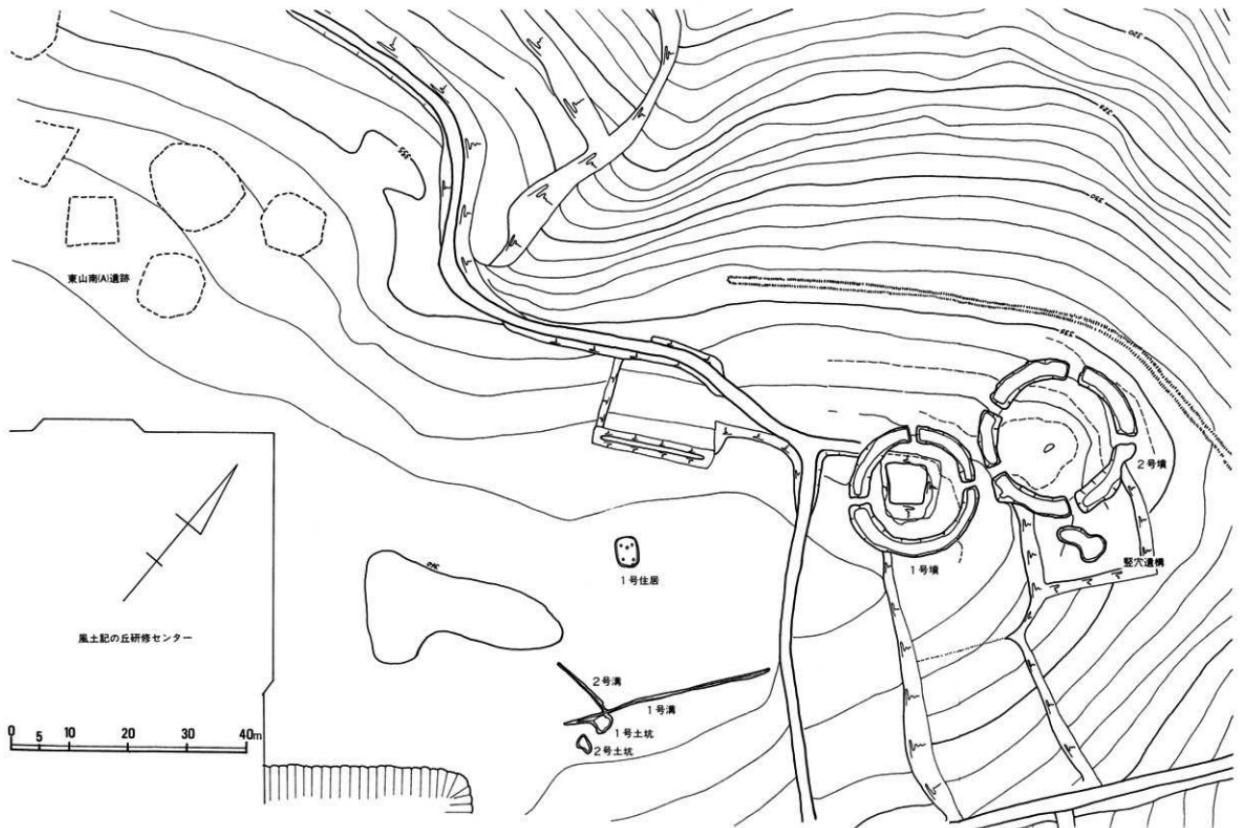
第3節 調査方法

当地区は、当初遺跡の所在が明らかでなかったため、遺跡の確認調査から開始している。確認の方法は、重機（パワーシャベルのバケット先端に鉄板装着したもの）で表土をできるかぎり除去した後、ジョレンによって造構確認面を清掃した。この結果、調査区域中央を通過している農道の西側では、尾根上平坦面や北側から住居址のプラン1基、平坦面南側より溝と土坑が検出された。

住居は、長軸中央部にセクションベルトを1本設定し、中央部分から掘り下げ、遺物を残しながら床面にそって拡張し、床面からの立ち上がり角度を見ながら壁を確認した。壁の上面は耕作や植物の根による搅乱で、明確ではない。溝は畑の境に掘られた溝と思われ、覆土は柔らかい。土坑の落ち込みは明確ではなく、倒木痕かシミ状のものである。

古墳は新発見の遺構で、1号墳は、重機によって表土を除去している最中に、溝部分の落ち込みが検出された。旧来より畑が一段高くなっているので、古墳の可能性も指摘されていたかもしれないが、調査着手時は桑畑が買収後10年ほど放置され、篠竹が背丈以上に茂っていたので、地形の観察は不可能であった。

2号墳は1号墳の周溝の表土剥ぎによって、同時に検出されたが、全体調査は用地買収後の2年次に実施された。1号墳・2号墳共に、十字にセクションベルトを設定し、墳丘・周溝の



第3図 東山南道路全体図

土層観察を行った。またエレベーションは完掘後、適当な箇所を選定して設定した。

第 III 章 遺構と遺物

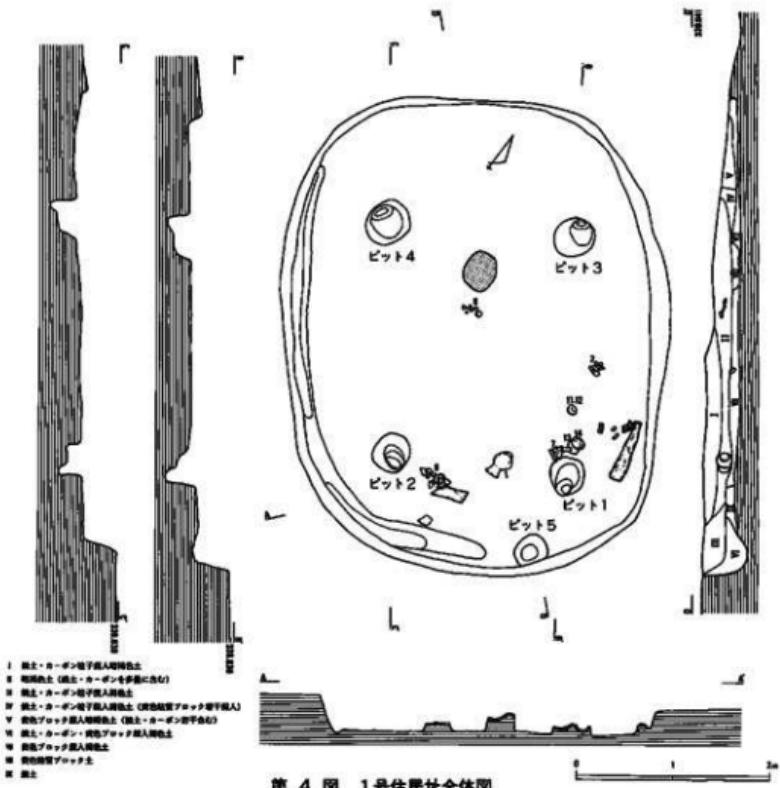
第 1 節 1 号住居址

東山頂上の台地平坦部、標高 339.21 m 付近で発見された住居址である。遺構確認面の地山は赤褐色粘土層であるが、遺構は黒褐色土に覆われ、発見当初は覆土が異常に黒く見え、しかも炭・焼土などを多く含んでいることから、新しい時代の遺構の可能性も想定した。しかし、セクションベルトを長軸中央に設定し、この両側から掘り下げたところ、続々と弥生時代後期の遺物が発見されて、竪穴住居である事が確定された。

この住居址は南山南遺跡で検出した、唯一の住居址である。出土遺物や住居構造は同時期の住居と比較して特別な所は無く、祭祀とか見張りなどの特殊な役割をもった住居とは考えられないが、単独で、しかも甲府盆地を見おろす台地最先端に造られた住居を見ていると、やはりその特殊性を強く感じざるを得ない。

住居址は隅丸方形のプランを呈し、長径 480 cm、短径 360 cm を測る。遺物は、最下層の床面から 10~25 cm の所で、住居の東側より集中して出土した。遺物が出土した面も比較的堅くしまっており、数回の床の張り直しをされている可能性もある。従って、遺物が当初の床面よりも約 10 cm 高い最新床面で検出されたということになる。床面はほぼ水平で、よく踏み固められている。住居内には、5 つのピットを確認し、ピット 1~4 が柱穴である。ピット 1 は直径 40×35 cm、床面からの深さ（以下同じ）15 cm、ピット 2 は直径 40×40 cm、深さ 12 cm、ピット 3 は直径 45×40 cm、深さ 21 cm、ピット 4 は直径 50×40 cm、深さ 18 cm。また、この住居の特徴として、柱穴の底にさらに楕円形のピットを確認した。ピット 1 は直径 18×14 cm、深さ 24 cm、ピット 2 は直径 21×17 cm、深さ 31 cm、ピット 3 は直径 18×12 cm、深さ 28 cm、ピット 4 は 24×14 cm、深さ 22 cm の掘り込みが見られる。このことは、少なくとも柱の底部が板状であったことを意味する。そして、ピット 1 と 2 のそれが南東方向、ピット 3 と 4 のそれが北西方向にあることから、柱は柱穴の中に住居の中央部から差し込まれて直立させられたという観察ができる。この立て方は 4 本の柱穴に共通するものであるから、当時の建築技術を知るうえで貴重な資料であろう。このような柱穴の在り方は、この遺跡の存在する東八代郡中道町上の平遺跡や、東山北遺跡、同郡八代町身洗沢遺跡、中巨摩郡敷島町金の尾遺跡などでも見つかっている。柱痕の先端プランから、柱の先端は板状に加工されていた可能性が高い。金の尾遺跡では、板状の柱根が発見されている。ピット 5 は、梯子受穴か貯蔵穴と考えられる。直径は 33×35 cm、深さは 15.5 cm で擂鉢状の断面を呈する。住居の壁は直立している部分も多いが、北側では表土が浅く攪乱を強く受けているために、若干プランに歪みがある。壁高は、東壁 16 cm、西壁 26 cm、南壁 34 cm、北壁 7 cm であり、北側が削平されていた。なお、幅 10~25 cm の周溝が、南西付近に見られる。

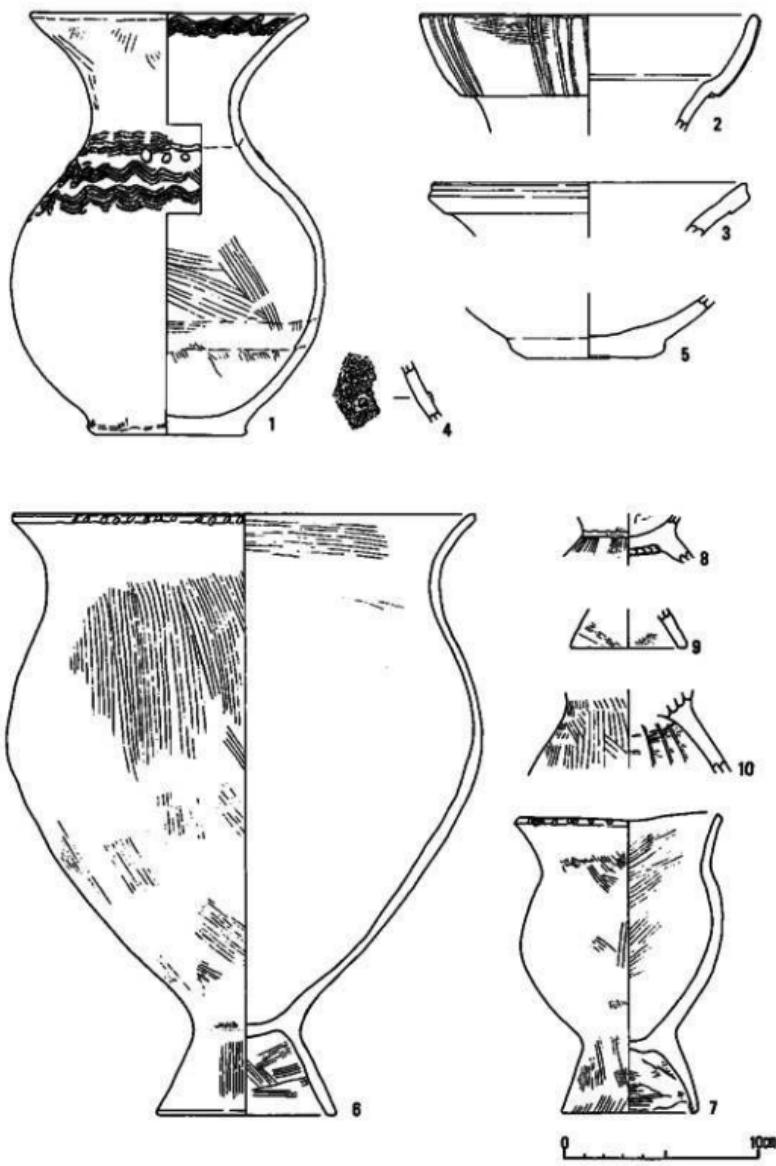
炉は地床炉で、北側の柱穴を結んだ線よりも若干南側の中央部に位置する。焼土は一括遺物



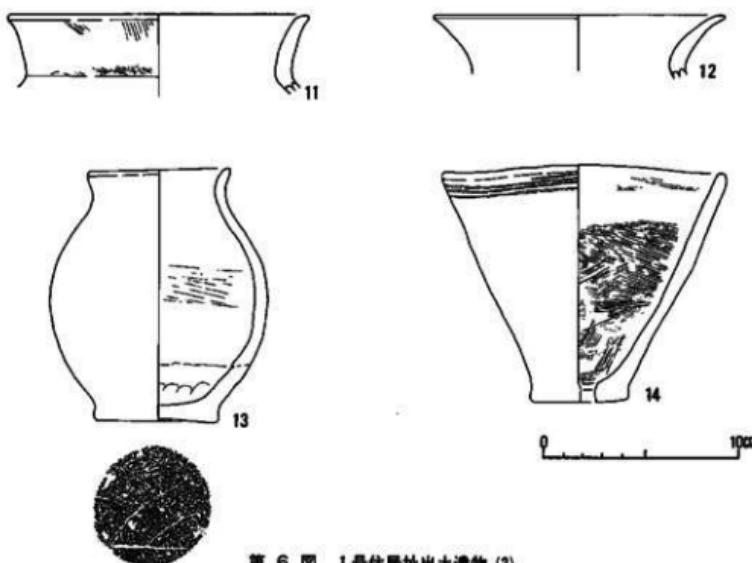
第4図 1号住居址全体図

の乗っている面より下で、初期の床面にまで達している。直径40×33cmの範囲が極めてよく焼けている。覆土は、焼土・カーボン粒子混入の褐色土を主体とする。また、東側の遺物付近より、集中して板状の炭化物が2箇所検出されている。柱材については薄いようであるが、材質鑑定などを行っていないので、樹種についてハッキリしたことは言えない。遺物出土状態や覆土の焼土・炭などから、本住居址が火災に遭遇した可能性が高いことが指摘できよう。

出土遺物は、既に記述したように一定の面上に一括土器が分布している。この一定の面は最終床面と考えられる面であり、遺物は住居南半分に集中していた。壺形土器・台付き壺・瓶・小型短頸壺などの一括土器は、横位で出土しており、壺・壺などの破片も多い。石器類の出土は無い。壺形土器（1）は素縁の口縁部内側と胴部上面に櫛描波状文を施したもので、頸部の下にある櫛描波状文の間には、3個を単位とする円形貼付文が見られる。胴部外面は刷毛整形の後に籠焼きが行われている。しかし、二次的な焼成を受けているためか、全体に赤みを帯びており、器面はザラザラして剥離が多い。内面は刷毛目が多く見られる。（2）は複合口縁



第5図 1号住居址出土遺物(1)

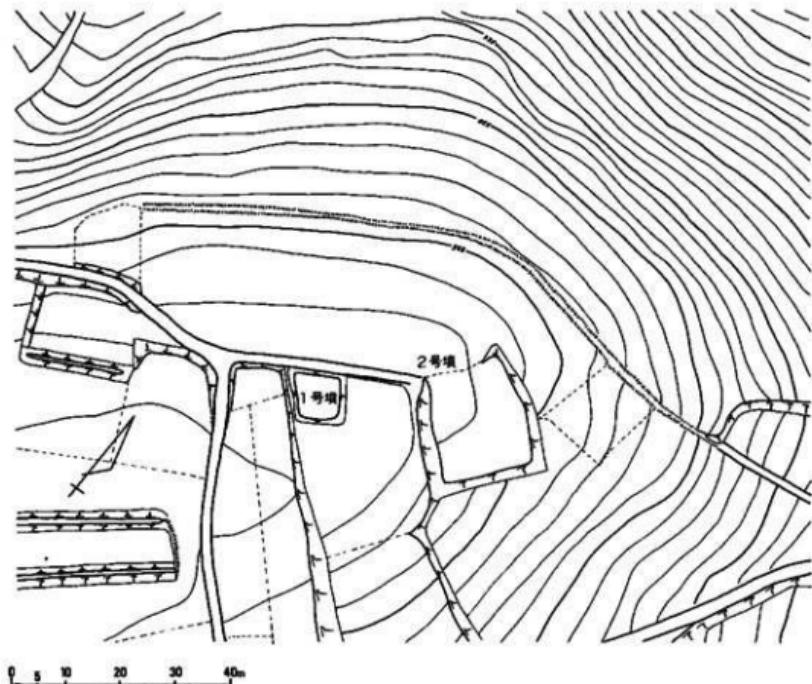


第6図 1号住居址出土遺物(2)

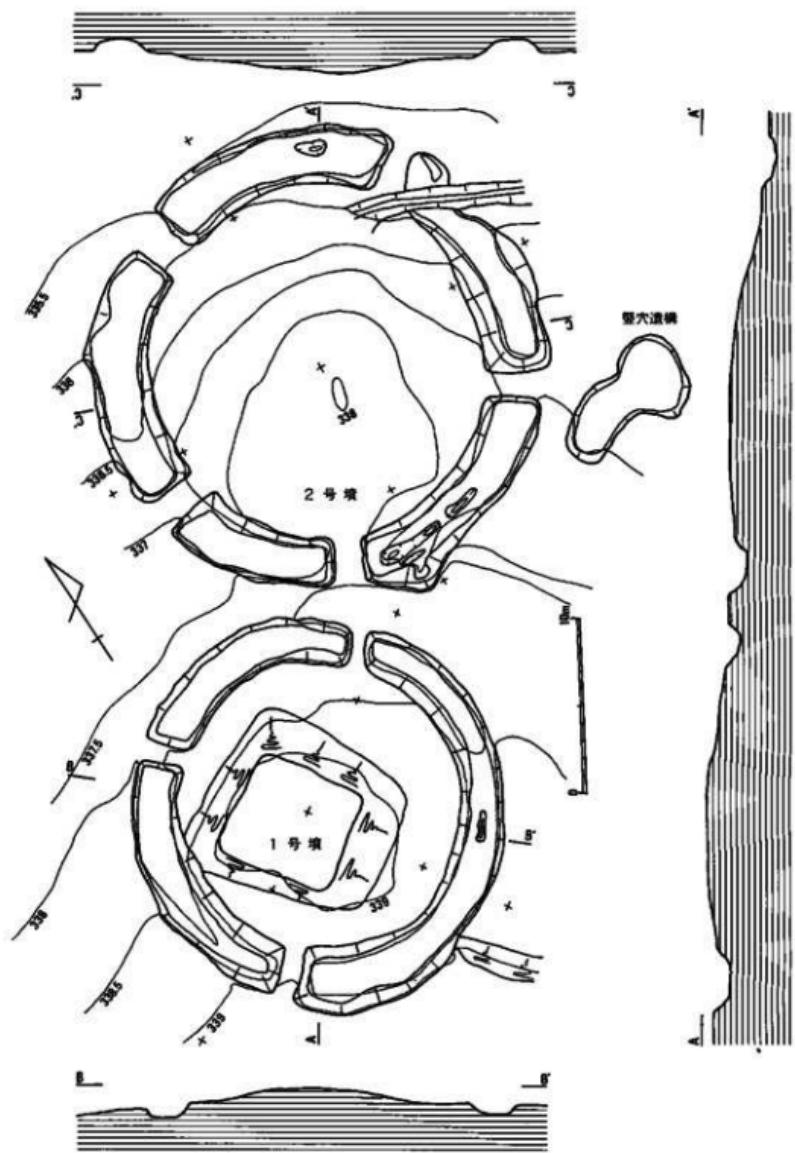
部の周囲に、縦に3～4本の細い貼り付け浮線文が5～6箇所張り付けられている壺形土器の口縁部で、灰茶褐色を呈する。(6・7)は台付き壺であるが、口唇部にはヘラによる刻みがみられる。肩部・脚部は縦方向の刷毛目がのこる。(13)の小型短頸壺は、口縁部径と底部径がほぼ同じで、底部には木葉痕が見られる。外面はナデ整形がされている。(14)は小型の瓶で、口縁部外面に浅い沈線が2条巡る。内面はハケで横方向に整形されている。

第2節 古 墳

本遺跡は、当初その存在を知られていなかった遺跡で、確認調査の結果発見されたものである。東山には、旧来より東山南遺跡として周知された遺跡がある。それは、三角点よりも北側の斜面から昭和56年（1981）に発見されたもので、古墳時代前期の円形周溝墓9基、方形周溝墓2基が検出されている（角川日本地名辞典『山梨県』1984）。これらの周溝部からは土器や鉄製品が発見されているが、調査当時は墳丘も削平されており、その存在は知られていなかった。各遺構は群集し近接しているが、重複しているものは無い。現在は、発掘調査時の表土が盛られ、台状の墳丘が形成されているので、その位置関係を見るのには都合が良い。この調査の報告書は未刊行であるため、今回のB区1号・2号墳との時期的差を明確に把握することはできないが、位置・構造などから見ても、決して大きな時間差があるものと思えないことから、両者を総合的に判断しなければならないものと考えられる。ただし、墳丘規模・立地からしても、B区の優位性は否定しがたく、両報告書が刊行された時点で、両者の社会的な構造面にも言及できるのではなかろうか。



第7図 1・2号墳発掘調査前現況図



第8図 1・2号墳全体図

第3節 1号墳

東山の最高地点より東側に突き出た台地縁辺部にあり、1号住居址からは約36m離れている。調査前の状況は、桃・スモモ畠、藪であった。墳形は円形をなし、直径は、周溝内上面で東西15.9m、南北16.3m、周溝外縁部で東西21.5m、南北22.5mを測る。古墳縁辺部の標高は、東338.4m、西338.2m、南339.2m、北337.9mである。墳頂の標高が339.5mであるから、それぞれの比高は、東1.1m、西1.3m、南0.3m、北1.6mとなる。

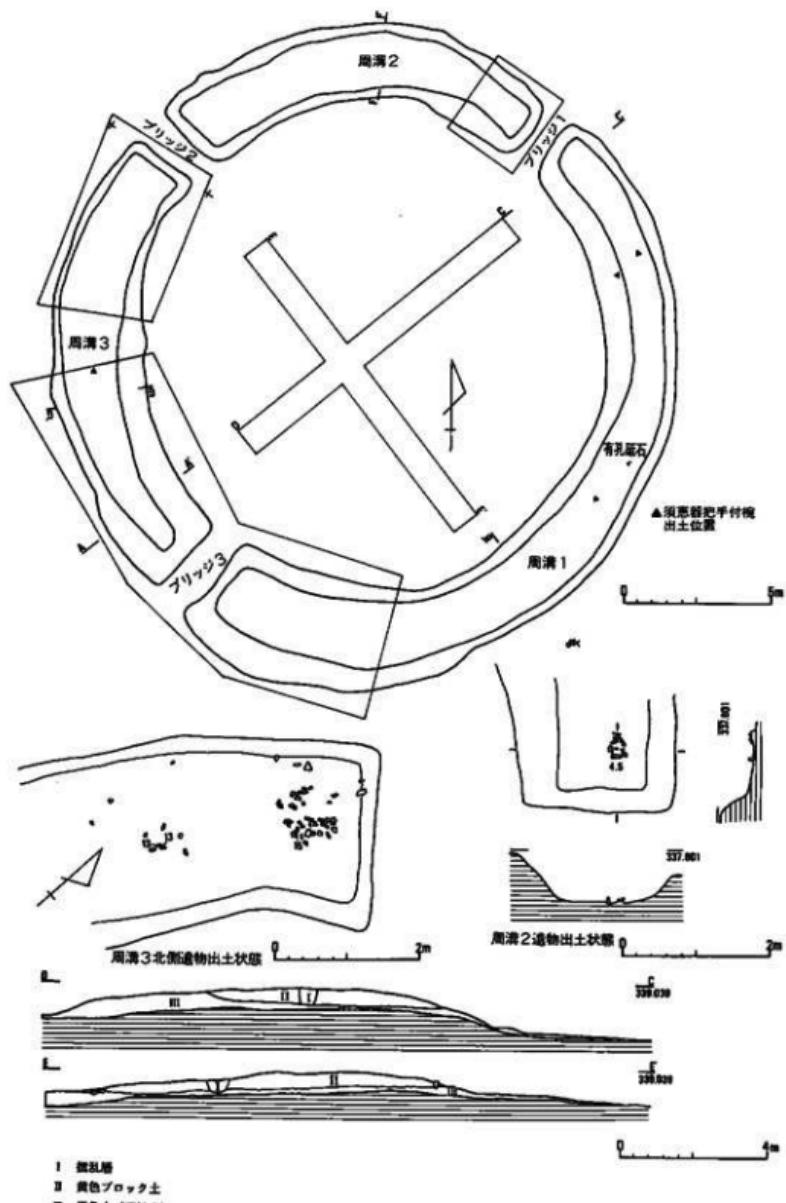
この古墳にはブリッジが3箇所あり、山梨県内に存する同類の古墳とは異なった特徴を示す。三珠町上野遺跡や東山南（A）遺跡などでも、ブリッジは検出されているが、3箇所設置されていたのは初めてである。ブリッジ1は長さ2.3m、幅0.8m、ブリッジ2は長さ2.5m、幅1.1m、ブリッジ3は長さ3.2m、幅1.2m。周溝は、周溝1が半円を描くほかは、概して短い。周溝1は幅2.7m、周溝内上面からの深さ（以下同じ）62.6cm、周溝2は幅2.6m、深さ50cm、周溝3は幅3.3m、深さ64cm。なお、周溝1のはば中央部に、長さ60cm、幅30cmのピットがある。覆土は、暗褐色土を主体とする。

墳丘は、墳頂部の一部に盛土が残っており、盛土の厚さは30cmである。盛土の範囲は、中央より東へ1.67m、西へ3m、南へ3.4m、北へ3.91m。盛土の下には旧地表が残っており、そこには弥生時代後期の遺物が若干含まれていた。盛土中に主体部は確認されず、開墾や耕作によって削平されたものと思われる。

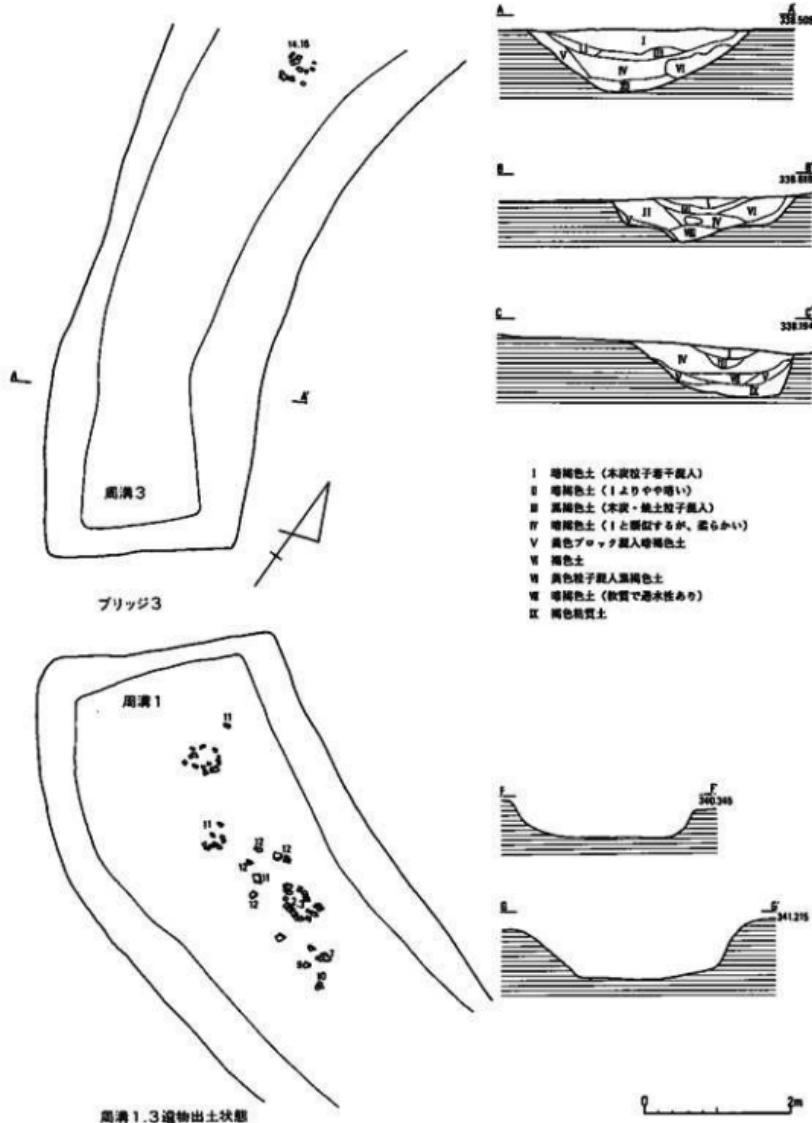
溝は周溝1が船底状の断面を呈し、南から北側に緩やかに傾斜しているが、周溝2は逆台形の断面で底面は平坦である。周溝3は南側が船底型の断面であるが、北側は逆台形の断面となっており、底は南から北に向けて緩やかに傾斜している。

出土遺物は、第9・10図に示した通り。周溝1と周溝2、周溝3のそれぞれから若干出土しているが、その出土状態は全く異なる。周溝1が最も長い距離を持つが、ブリッジ3に近い南側から土師器2、3、7、9、10、11、12（第11図Noと同一）が出土している。また、周溝1と周溝3からバラバラに須恵器把手付椀が出土している。あたかも破碎して三方に撒かれたような状態が観察できる。このほか周溝1からは有孔砥石、凹石などが出土している。これらは、周溝の底面に近い黒褐色土及び、褐色粘質土から出土している。周溝2の東端からは壺形土器一括が出土している。直立しておかれたものが倒壊して出土しているが、復元ができず4、5（第11図）が図示できたのみである。遺物は周溝の底面に密着して出土した。周溝3からは中央部から14、15（第12図）、北側端部から13（第11図）、15（第12図）が出土している。北端では土師器の壺形土器・壺形土器の破片が多く出土しているが、接合できず、実測が不可能であった。

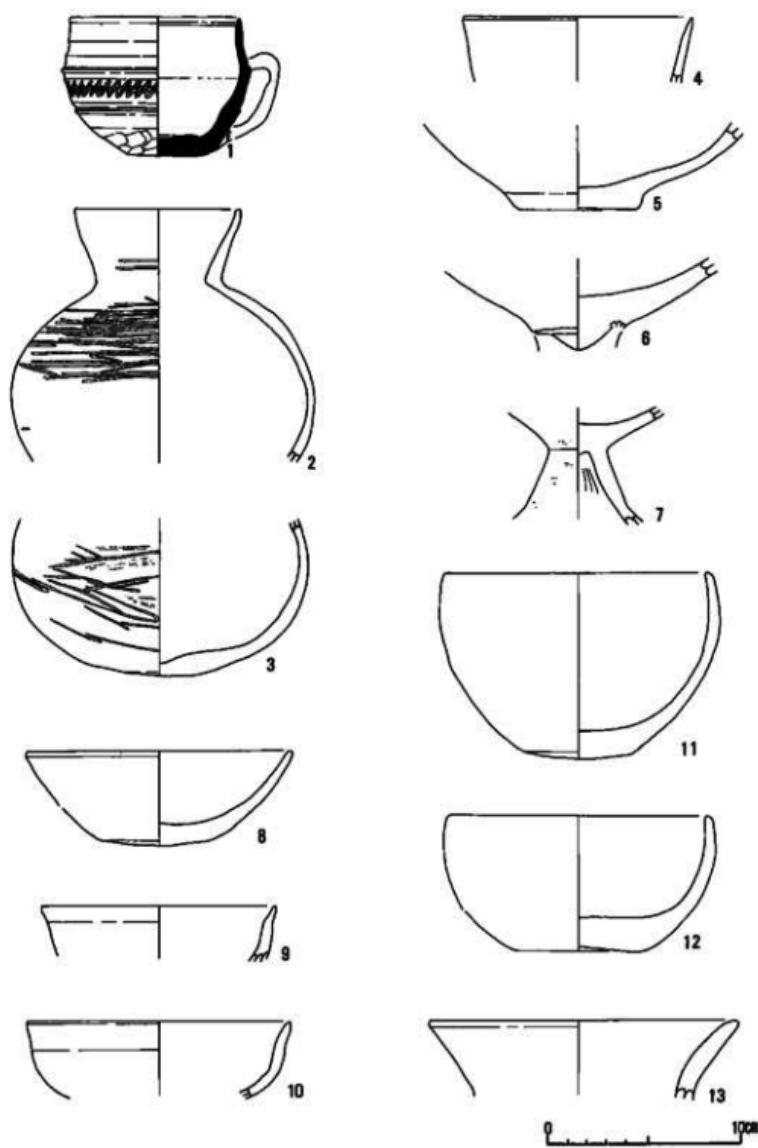
出土遺物の特徴的なものは1の須恵器把手付椀である。把手は欠損しているが、胴部には2本の隆線のあいだに極めて細い描波状文が巡らされている。2、3は壺であるが、同一個体かもしれない。このほか図示したものには壺、高壺、壺形土器などがある。特殊なものではメノウ原石があり、古墳の埋葬祭祀に伴って周溝部に投棄された可能性もある。



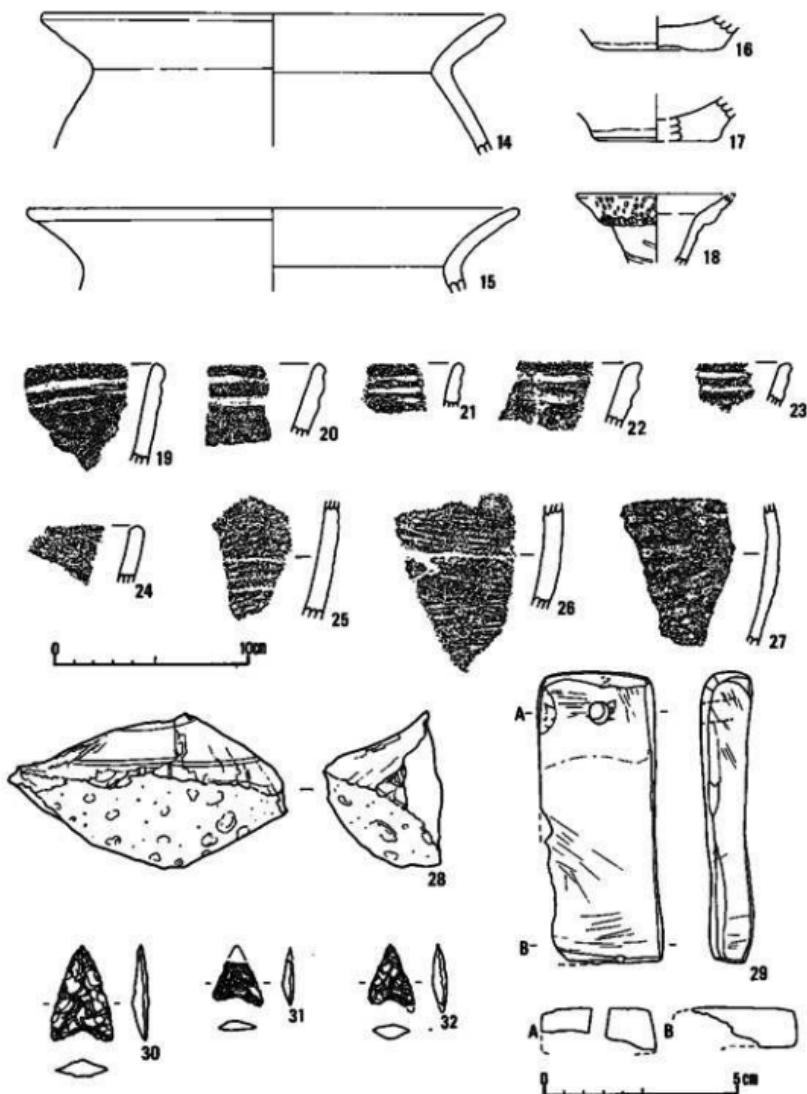
第9図 1号墳・墳丘トレンド・セクション、遺物出土位置図(1)



第 10 図 1号墳・遺物出土位置図(2)、周溝セクション・エレベーション



第 11 図 1号墳出土遺物 (1)



第 12 図 1号墳出土遺物 (2)

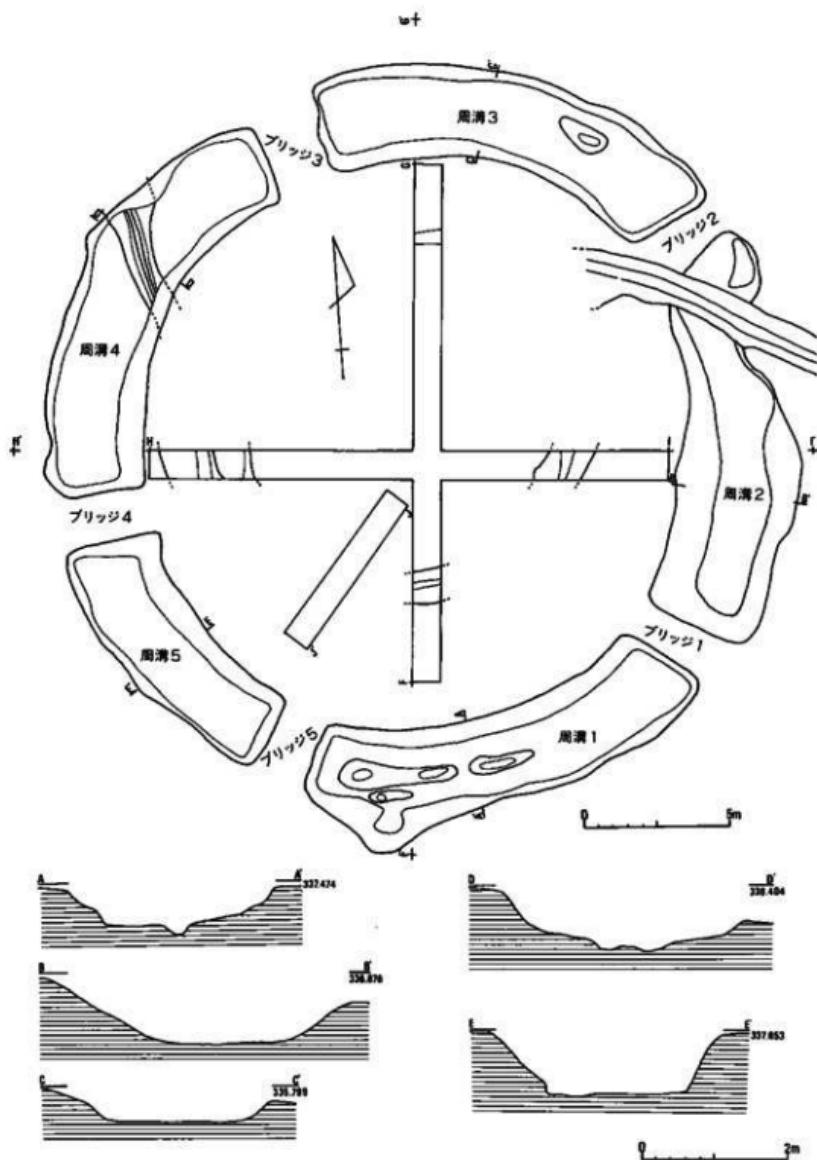
第4節 2号墳

1号墳の周溝外縁から2.7mの位置に、2号墳の周溝外縁があり、2つが並んだ形で築造されている。そこは、東山の平坦面が突き出た所で、大丸山古墳の南東側にあたる。調査前の状況は、桃、スモモ、梅畠であった。墳形は、1号墳と同じく円形をなしており、直径は、周溝内上面で東西18.7m、南北19.7m、周溝外縁部で東西26.1m、南北26.5mを測る。古墳縁辺部の標高は、東336.3m、西336.7m、南338.2m、北335.5mである。墳頂の標高が338mであるから、それぞれの比高は、東1.7m、西1.3m、南-0.2m、北2.5mとなり、わずかなマウンドをもつ事がわかる。

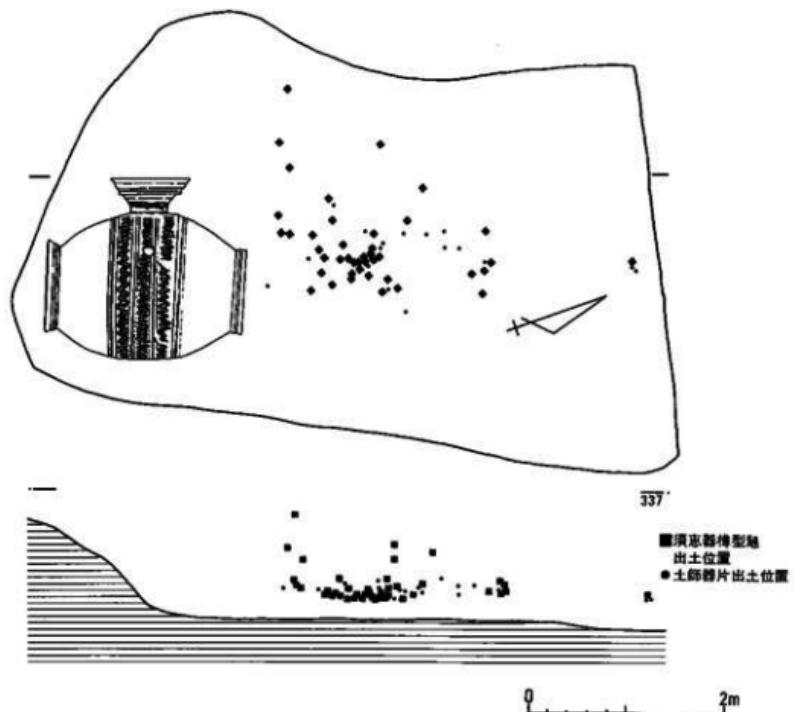
1号墳の特徴であったブリッジが、2号墳からは5箇所検出された。ブリッジ1は長さ3.5m、幅1.4m、ブリッジ2は長さ3m、幅1.4m、ブリッジ3は長さ2.5m、幅2m、ブリッジ4は長さ3.5m、幅1.7m、ブリッジ5は長さ2.7m、幅1.7mである。これが、円形の周溝を分断する形になっている。周溝の幅は一定ではなく両端部・中央部でそれぞれ異なる。また、深さも南側と北側では地形によって異なるが、中央部でのおよその計測値を示すと、周溝1は幅3.2m、周溝内上面からの深さ（以下同じ）50cmで、周溝外側南端が三角に突出している。周溝2は幅3.7m、深さ94cmで、北側は畠の段及び溝によって削平され、正確な幅や長さが決定できない。周溝3は幅3.1m、深さ52cm、周溝4は幅3.2m、深さ78cm、周溝5は幅3.1m、深さ89cm。深さが不統一であるのは、地形に応じて古墳を築造したためと考えられる。覆土は、暗褐色土あるいは黒褐色土を主体としている。また、周溝底面には黄褐色土が堆積し、地山土と判別が困難であった。遺物は、この黄褐色土上に乗っているものが多く、周溝部の掘削後やや時間が経過してから、埋葬又は祭祀に伴う土器等の廃棄がなされたのであろう。

墳丘は盛土であるが、盛土の残りは少なく、墳頂部上面に残存しているにすぎない。墳頂部での盛土の厚さは、46cmである。盛土の範囲は、中央より東へ4.95m、西へ9.22m、南へ4.2m、北へ6.4m。盛土の下には旧地表が残っているが、この地表土中には、弥生時代後期の遺物が若干含まれていた。なお、主体部は確認されなかった。これは、盛土後に墳頂部を掘り下げて設置したが、開墾等により削平されてしまったものと考えられる。その他、開墾による畠の区画の溝（根切溝）が墳丘を縦横に数本掘り込んでいたが、その調査はトレーンチによって一部確認したのみである。

周溝内部から遺物が出土しているが、各周溝からの出土状態は画一的ではない。周溝1からは東端から土器が集中して出土しているが、細片のため接合ができず図化されていない。壺形土器か甕形土器の破片と考えられる。周溝2からは樽型甕が出土している。第14図で破片のドットマップを示しているが、これから観察でも判るように、周溝中央部より内側に集中しており、高いレベルから出土しているものは周溝の縁から壁に添って落ち込むような状態を呈する。したがって、墳丘側から破碎した樽型甕を墳丘内側から周溝に廃棄したか、周溝の上部縁に破碎して廃棄したものが、周溝底部に流れ込んだ可能性がある。周溝底面から若干浮いているのは、溝の掘削後、遺物廃棄まで若干の時間差があったことを示すものである。この時間



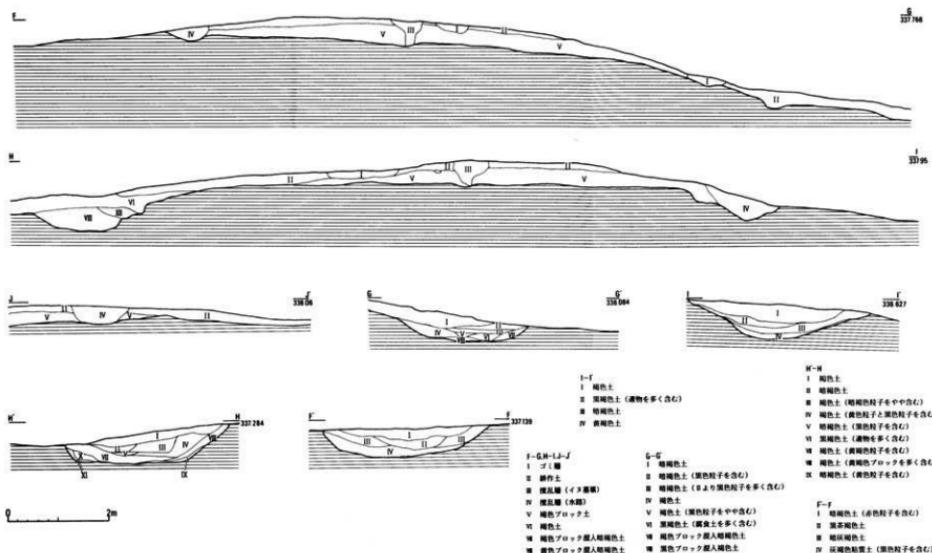
第 13 図 2号墳平面図・周溝エレベーション



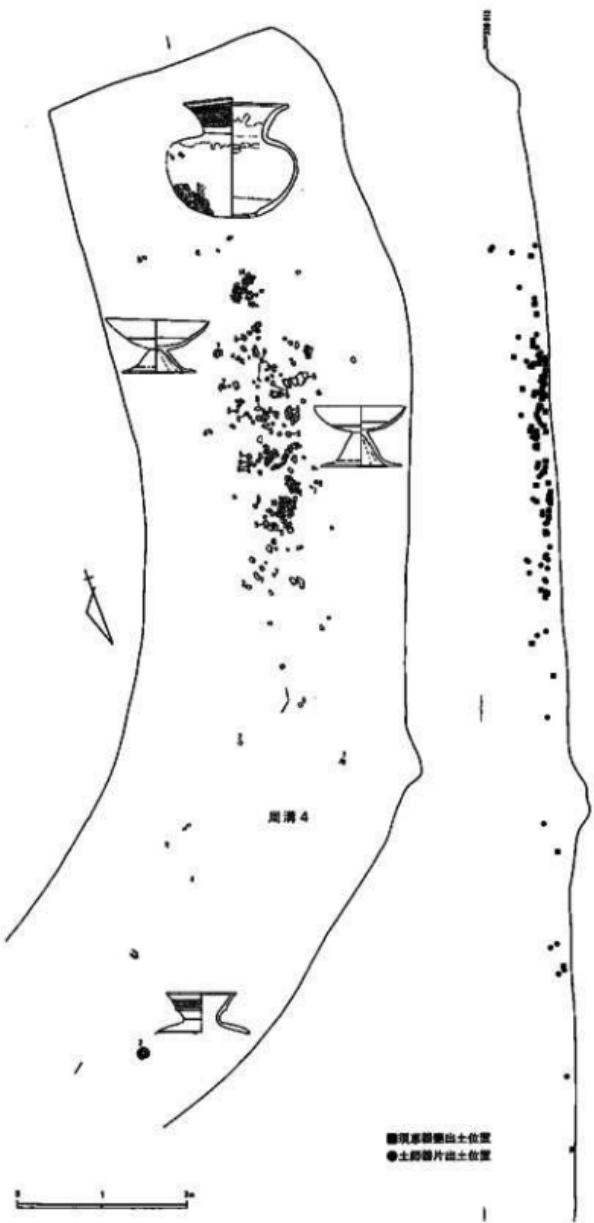
第14図 2号墳周溝2遺物出土位置図(1)

は調査中に体験したことであるが、一回の冠水で形成される堆積土の生成時間と同じくらいのものであるから、極めて短時間と考えてよかろう。周溝3の出土遺物は殆どなく、流れ込んだ土器破片が数点出土しているのみである。周溝4は最も遺物が多かった溝で、須恵器壺、土師器高杯、壺、壺などが出土している。特に周溝南側の方が多い、溝の中央部に集中している。遺物のうち、須恵器の接合は良好であったが、土師器は接合が困難であった。周溝5からは遺物が少ない。

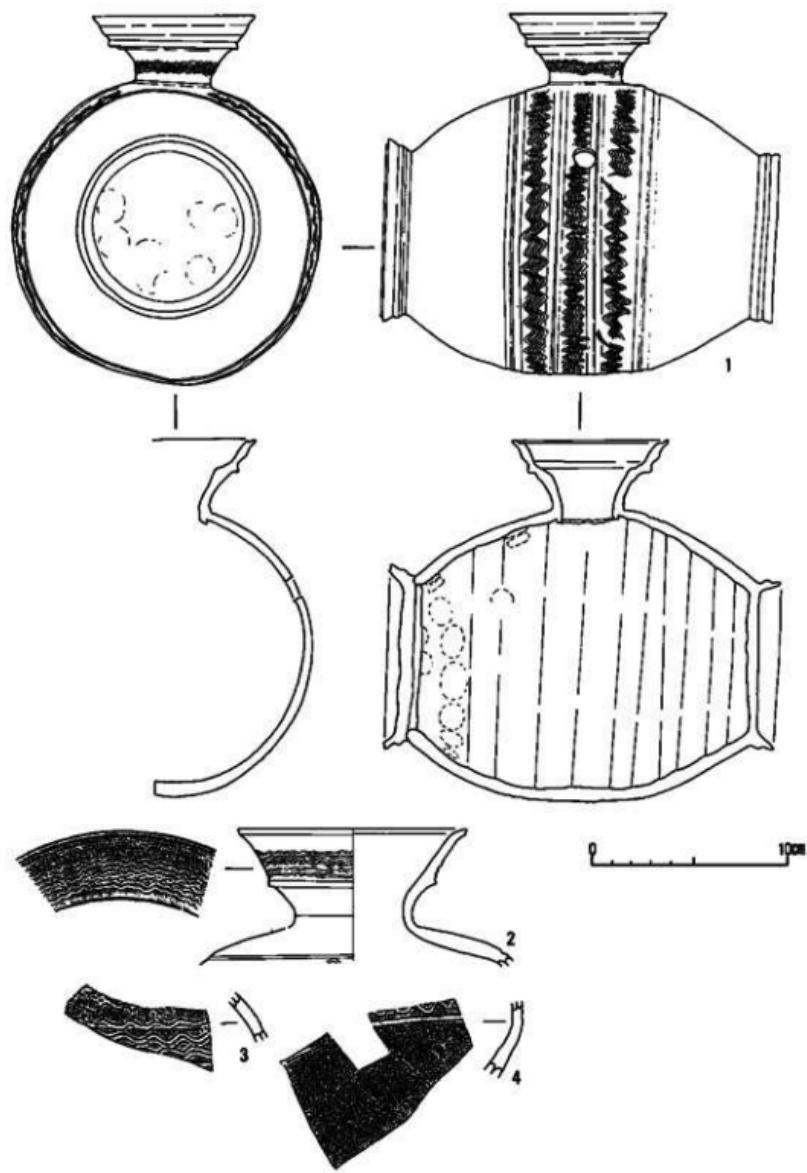
これらの出土状態を見ると、墳丘を挟んで周溝2と周溝4から最も遺物が出土しており、墳頂を中心とした対象の位置から、須恵器などの遺物が出土している点が注目される。また、ブリッジ1の両側で出土しているが、他のブリッジではそうした現象が見られない。このことからすると、ブリッジ1はこの古墳にとって特別な意味をもつものと考えられよう。というのは、このブリッジ1の前方には、同時期の遺物を包含する瓢箪形の竪穴造構が存在するからである。



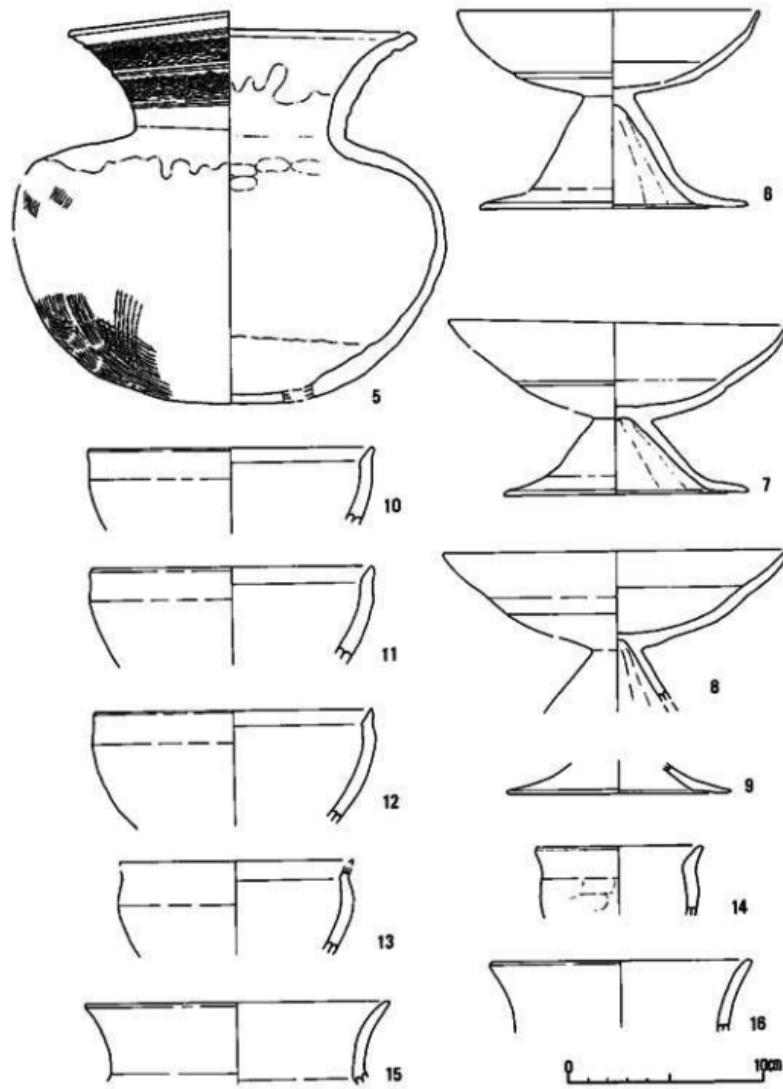
第 15 図 2号墳セクション



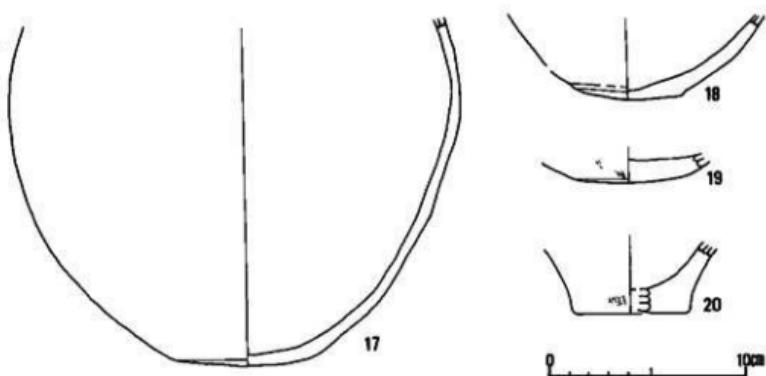
第 16 図 2号墳遺物出土位置図 (2)



第 17 図 2号墳出土遺物 (1)



第 18 図 2号墳出土遺物 (2)



第19図 2号墳出土遺物(3)

2号墳出土遺物には、須恵器・土師器などの土器類が中心を占める。このほか若干の石器類が出土しているが、遺構に伴出しているものなのか明らかではない。以下、遺物について説明を行うが、遺物図（第17～19図）に示した遺物Noは、遺物出土位置図（第14～16図）のNoと同一である。

(1)は須恵器樽型壺である。周溝2より出土したものであるが、既に説明したように破碎され撒かれたような様相を呈していた。復元してみると3～4片が不足しているだけで、ほぼ完形品となった。器高18.5cm、口径8.2cm、胴部横幅20.5cm、樽部胴最大径15cm、同両端径8.6cm、9.6cmを測る。口縁部1.5cm下に一本の突帯が巡り、その下の頸部に極細の櫛描波状文が巡らされている。胴部は右側を底部にして作られ、左側側面が最後に蓋されている。内面は輪轂整形痕が残っており、蓋に近い部分の内面には指頭痕がみられる。胎土は灰色であり、断面は中央部がやや赤褐色をしている。生産地は大阪・陶邑と推定される。

(2～4)は周溝4より出土した須恵器壺の口縁部と胴部破片である。口径12cm、現存高5.7cm、頸部までの高さ5cmである。口縁部外面に櫛描波状文が施されているが、(1)と比べものにならないほど櫛描波状文が粗い。胴部の櫛描波状文は2本の沈線に区画された中に、横位に描かれている。この櫛描波状文は口縁部の櫛描波状文と同一用具で施文されている。胎土は灰白色で、口縁部内面に若干の自然灰釉がみられる。胴部には黒色の色むらがみられるが、着色したものか付着物であるのか明らかではない。

(5)は周溝4から出土した須恵器壺である。窓内部での焼け歪みによって、頸部や口縁部に歪みがみられる。口縁部内部と胴部肩に自然釉が厚くかかっている。口径17.2cm、器高20.2cm、胴部最大径22.5cmである。口縁部外面に3本の隆線を巡らし、その間に1条づつの櫛描波状文が施され、波状文は鮮明に描かれている。胴部下半は平行叩目がみられる。胎土の色調は暗灰色をしており、釉は灰黒色で光沢がある。

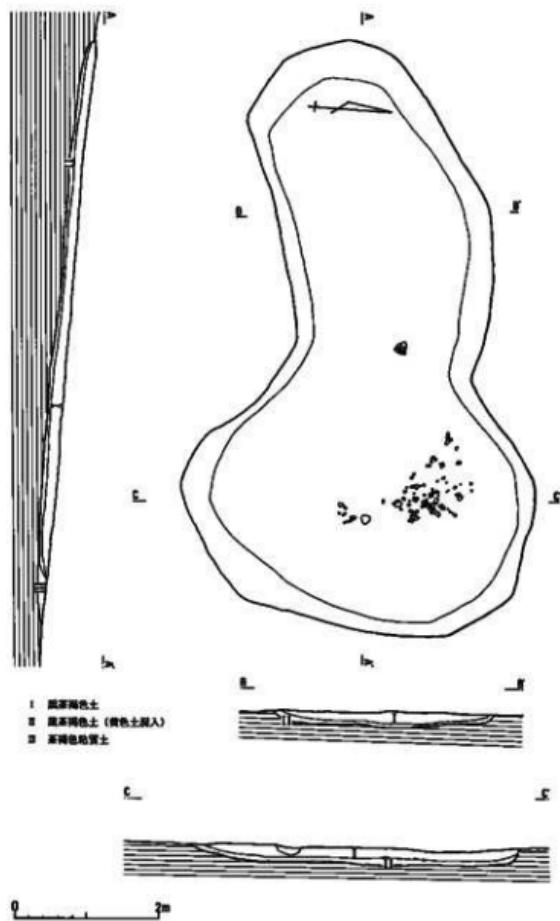
(6) 以降は土師器である。これらの遺物の大部分は周溝4から出土しているが、(17)は周溝1の北側で、ブリッジ1の南側から出土した壺形土器(?)である。周溝底面から一括で出土しており、築造後、間もなくに置かれたものであろう。(6~9)は高壙、(10~13)は壙である。(14~16、20)は壺形土器、(17~19)は壺形土器と考えられる。このほか、2号墳の周溝からは打製石斧、磨石、石鏃などが出土している(第21図)。

第5節 壇穴造構

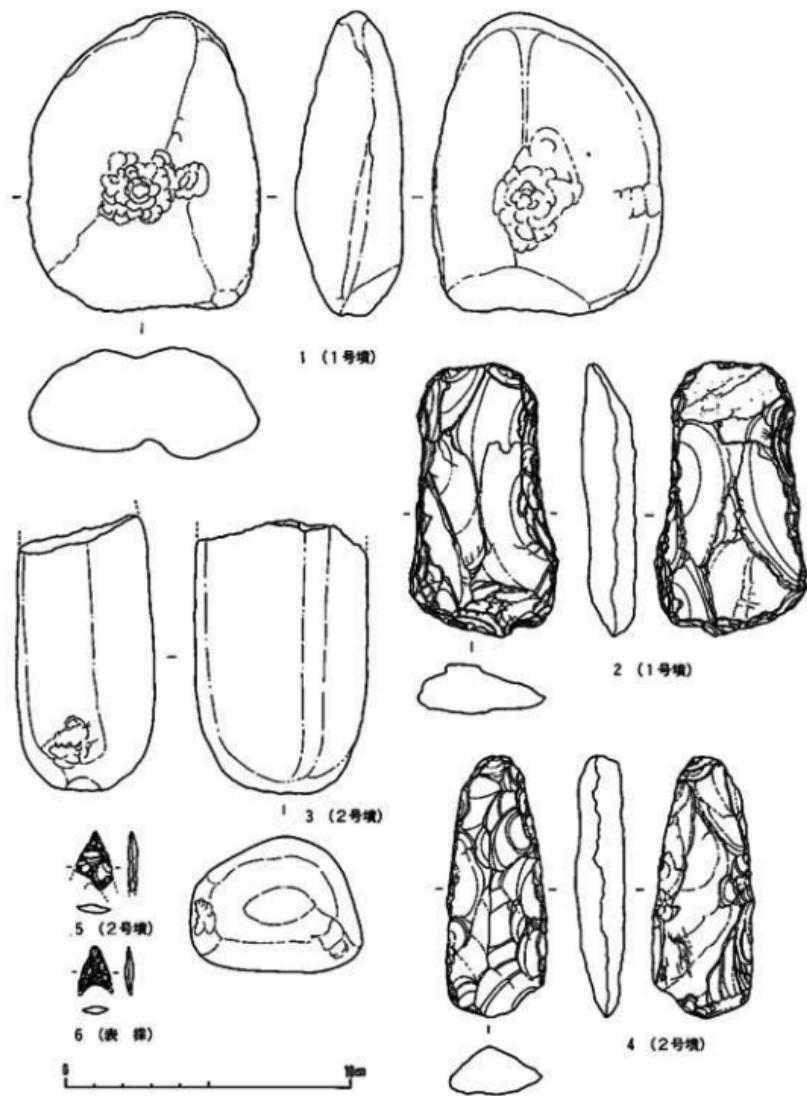
2号墳周溝1の外縁から、南東方向へ1.3m離れた所にある。調査前の状況は、藪であった。楕円形のプランを呈し、長軸8.2m、短軸(くびれ部)2mを測る。南北に対して約77度の傾きを示す。遺物は土師器が殆どであり、造構の北東方向より、集中して出土している。しかし、細片ばかりで、特筆すべきものはない。

削平された様子はないが、深さは22cmと浅い。底は、特に踏み固められた形跡もなく、造構に伴う施設等は、確認できなかった。また、覆土は黒茶褐色土を主体とするが、覆土中から焼土や炭が若干検出された。

この造構の用途は、全く不明である。しかし、古墳の近くにあることから、それと何らかの関係にあったことが推定される。



第20図 壇穴造構



第 21 図 1号墳・2号墳出土石器

第Ⅳ章 考察

第1節 遺構

(1) 住居址

東山丘陵上の最高地点を避けるかのように、北側に東山南（A）遺跡・稻荷塚古墳、南側に上の平遺跡、東側に東山南（B）遺跡が取り囲んでいるが、これらの遺跡は絶て墓である。言うなればこの東山一帯は、死者の丘とも言えることができる。しかし、この死者の丘から、今回の調査によって初めて住居址が検出された。標高340.2mの三角点よりも120m程東の平坦面から、たった1軒の弥生時代後期の住居が発見されたのである。住居構造には特別な施設が残るわけではなく、特殊な遺物が出土しているわけでもない。ただ火災によって消失した可能性が高い事が、焼土や炭化材の存在によって知られる。この住居は、僅かに北側に向いた斜面に立地しており、同時期の東山北遺跡や、上の平遺跡南の集落群などとは隔離された環境に位置する。この住居の遺構・遺物を一見する限りでは、特別な構造や特殊遺物をもつような特異な遺構ではないが、単独住居であることとその特殊性を感じる事ができる。こうした住居の役割が、甲府盆地への見張り小屋であったのか、お座小屋としての利用、あるいは村八分などによるものかは、今後の類例や全国的な例の収集を待って判断したい。

(2) 1号墳・2号墳

今回発見された古墳は、その周溝の形態が特殊なことから、本県だけでなく全国的に注目されるべき遺構である。と言うのは、周溝部の陸橋が3～5カ所という例は全国的にも希有であるからである。古墳時代の墳墓を取り巻く円形周溝が、1～2カ所掘り残されて陸橋となっている例は全国的にも多く、本県でも三珠町上野遺跡円形周溝墓や、中道町東山南（A）遺跡の円墳、方墳（方形周溝墓か）、塩市西田遺跡などが検出されている。また、陸橋を伴わない5世紀代の低墳丘墳には、甲府市桜井塚A地区3号墳（方墳）、柳町六科丘古墳（造り出し付き円墳）などがある。更に、御坂町姥塚遺跡1・2号周溝遺構（円墳）などは6世紀代のものである。しかし、1・2号墳のような特殊な溝の構築方法が、本県の同時期以降の低墳丘墳の築造に反映されていない事からすれば、突然変異的な遺構として理解せざるを得ないのか。あるいは、この特徴が被葬者及び埋葬者の集團を特定する鍵になるかも知れない。なお、これらの年代決定は周溝から出土した遺物によっている。

東山南1号・2号墳が特殊なのは、周溝部にかかる陸橋の数が多いということであるが、甲府盆地での古墳を築いた集團間の、階級的な相違を想起させるという地域的な問題も提出している。

この問題は、本風土記の丘公園内にあるかんかん塚（茶塚）古墳を造った勢力との比較を考えた場合に気付く事である。東山丘陵の北裾部に並ぶ、銚子塚古墳・丸山塚古墳の東側に位置するかんかん塚（茶塚）古墳は、円墳で明確な周溝をもたない。主体部は竪穴石室で、長さ4.52m、幅1.12～0.8mである。短甲、挂甲小札、青、鉄鋸、鐵鎌、刀子、三環鈴、輪轆、鉢具、帶

金具などが石室内より出土しており、須恵器・土師器などは伴出していない。この古墳は、言わば鏡子塚古墳・丸山塚古墳・大丸山古墳などの畿内型古墳の伝統を色濃く残している古墳であり、そうした伝統が副葬品・石室・古墳立地に受け継がれていることを見れば、東山南1・2号墳とは基本的に異なる集団によって築造されたことが、容易に想像できる。

では、東山南1・2号墳はどのような集団によって築造されたのであろうか。低墳丘墳の系譜は、弥生時代の方形周溝墓を起源とし、古墳時代後半にまでまたがって発見されている（白井久美子 1983）。また、古式須恵器をもつ古墳・低墳丘墳は、北武藏古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所による三県シンポジウム資料『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』に、各地の遺跡が紹介されている。低墳丘の円墳・方墳などで、把手付椀・樽型埴・壺などが出土している古墳等を抜粋すれば、次の表の様になる。

県名	遺跡名	遺構名	出土須恵器	時期	備考
群馬	空沢遺跡	13・37号墳周溝	把手付椀	5世紀第3	墳丘無し
群馬	白藤古墳群	Y-6号墳周溝	樽型埴	6世紀前半	
長野	四ツ屋遺跡	特殊遺構	把手付椀・埴輪	5世紀後半	
埼玉	殿ノ前遺跡	祭祀遺構（溝）	樽型埴・高壺	5世紀後半	土壤を挿む溝中
埼玉	生野山古墳群	14号円墳周溝	樽型埴	5世紀後半	TK 208
埼玉	白幡本宿遺跡	4号墳周溝	把手付椀（？）	5世紀後半	
静岡	小川城遺跡	第6・18地点（溝・祭祀）	把手付椀	5世紀後半	
神奈川	比々多遺跡群	上坂東4号中坂東3・4・5号墳周溝	小型壺・壺・蓋	5後半～6世紀前半	TK 208～23・MT 15
神奈川	清水ヶ丘遺跡	1号墳周溝中（低墳丘墳）	埴	6世紀前半	TK 47、I-5
茨城	橋の台古墳群	4・5・6号墳	壺・埴	5世紀後半～6世紀	
茨城	赤塚古墳群	W10号墳	壺	5世紀後半	
栃木	宮内2号墳	周溝内部	埴	5世紀末～6世紀	
宮城	裏町古墳	主体部周辺	樽型埴・器台・台付直口壺・横瓶	5世紀後半	

このように同時期の低墳丘古墳群や方形周溝墓・石室をもたない前方後円墳などが集合する古墳群中から、古式須恵器が発見されている事を考えると、低墳丘墳で須恵器を溝から出土させる古墳を築造した集団は、土着性の強い集団である可能性が浮かび上がってこよう。

方形周溝墓や低墳丘墓が一定の地域内に、長期に連続して築造されることは少ないので、本地域でも弥生時代末～古墳時代初頭に形成された上の平方形周溝墓群の後、東山南（A・B）遺跡までは若干の空時間が認められる。この間隙を埋めるような古墳は、調査がほぼ全面に及んでいる東山丘陵上で検出するのは困難であろう。一方、東山の西隣の米倉山には、主体部構造が不明な低墳丘墳の存在も知られ、更に、この地域では唯一の前方後方墳である4世紀中葉の小平沢古墳もあり、在地勢力の墓域が米倉山に移動している可能性もある。

東山丘陵周辺では4世紀後半代の鏡子塚古墳・大丸山古墳などが出現していくことから、畿内勢力が畿内勢力と結び付いた在地勢力の首長のみが、東山丘陵を墓域としていったのではないかだろうか。やがて、5世紀後半になると權力の拡散化が進行し、相対的に畿内王権に直結した勢力が減退し、在地勢力が復興したものと思われる。

参考文献

- 小林 広和 1979『甲斐茶塚古墳』山梨県教育委員会
末木 健 1987『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会
清水 博 他 1985『六科丘遺跡』柳形町教育委員会・六科山遺跡調査団
中山 誠二 1990『桜井畠遺跡A・C地区』山梨県教育委員会
末木 健 1988『福荷塚古墳』山梨県教育委員会
堀之内 泉 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会
白井久美子 1983「小規模古墳の一類型—ブリッジ付き円墳の検討—」『古代』75・76合併号
山崎 金夫 他 1978『西田遺跡—第1次発掘調査報告書』山梨県教育委員会

第2節 遺物

(1) 弥生土器

1号住居出土の一括遺物には、壺・台付き甕・甕・瓶がセットで出土している。この土器セットの編年上の位置は、後期後半におかれるものであるが、弥生時代の編年の中に当てはめるとすると、中山誠二氏の言う「住吉式」（中山誠二 1986『甲府盆地における古墳出現期の土器様相』『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会）、筆者の後期3段階（中田小学校・住吉・六科山Ⅰ期）に属するものであろう（1990『高根町誌』）。

なお、近年、弥生時代の遺跡の調査が活発になっており、資料の蓄積も著しいものがある。これは低湿地の調査の進展とかかわりがあり、今後、中部横断道路建設やリニア・モーターカー建設などの盆地内部の開発が進むことによって、資料の増加は期待できよう。

(2) 須恵器

東山南1号墳から須恵器把手付椀1個、2号墳から櫛型甕1個、甕2個が出土している。

把手付椀は田辺昭三氏（1987『須恵器大成』角川書店）の研究によれば、1期前半に盛行した器種で、ほぼその時期に限定されるという。大阪陶邑窯での型式ではTK216～TK208に比定され、実年代は5世紀後半～6世紀前半である。把手付椀は県内最初のものである。初期の把手付椀は底部が平らで大きな把手が付けられ、器体部には太い凸線・凹線・櫛描波状文で装飾するなど、素朴で純重な感じのものから、やがて、底部が丸く器面に繊細な文様が施され、耳形の把手が付けられるようになる。本例は底部が丸く把手部が円柱状の粘土紐で作られていることから、この器種でも中葉段階のものと言える。

2号墳出土の樽型埴も初期須恵器のひとつで、把手付椀と同様に、Ⅰ期前半に属するものである。樽型埴の初期のものは両端と肩部の径に余り差がないが、次第に中央部が膨れた形状を呈する。本例も中央部が膨らんだものであることから、樽型埴の中でも比較的後半のものと思われる。従って、この実年代も把手付椀の年代とはほぼ同時期と考えられよう。

2号墳出土の須恵器甕も出土状態から同時期の所産と言える。

では、これらの須恵器を本県の須恵器の編年の中に置くとすれば、どのような位置に置かれるのであろうか。

本県の初期須恵器については、既に①橋本博文氏（1979「甲斐出土のⅠ～Ⅱ期前半の須恵器」『丘陵』7号 甲斐丘陵考古学研究会）や②③坂本美夫氏（②1987「山梨県」「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」、③1990「山梨の須恵器出現期の様相」『考古学ジャーナル』No.316）、④末木 健・坂本美夫（1984「古墳時代土器の研究」古墳時代土器研究会）によって述べられている。この年代的な見解は次の通りである。

No	遺跡名	須恵器種	橋本案	坂本案	末木案	文献
1	中道町東山南1号墳	把手付椀		TK23	TK 216～208	①・本報告
2	中道町東山南2号墳	樽型埴・甕			TK 216～208	本報告
3	御坂町二の宮西46住	埴・甕		ON46～TK 208		②③
4	御坂町二の宮西71住	埴		ON46～TK 208		②③
5	甲府市大坪遺跡	無蓋高坏	TK 208			①
6	御坂町二の宮259住	甕		TK 208～TK 23		②③
7	豊富村宇山平遺跡	坏蓋	TK 23			①
8	長坂町柳坪A遺跡14住	埴	TK 23	TK 23	TK 23	①②③報
9	長坂町柳坪A遺跡9住	坏	TK 47	TK 23～MT 15	TK 23	①②③報
10	御坂町二の宮82住	坏		TK 23～TK 47		②③
11	柳形町六科山古墳	甕		5世紀後半		③・報告書
12	八代町莊塚	坏・甕	MT 15～TK 10	MT 15～TK 10		①②③
13	御坂町姥塚131住	坏蓋		MT 15		③
14	御坂町二の宮227住	坏		MT 15		③
15	御坂町姥塚8住	坏		MT 15		③
16	御坂町姥塚19住	坏		MT 15		③
17	境川村八乙女・馬乗山古墳	甕・埴		MT 15		③

この中で坂本美夫氏は、東山南1号墳出土須恵器把手付椀をTK 23型式に近いものと見ているが、筆者はTK 216型式～208型式に属するものと考えている。また、2号墳の樽型埴・甕なども同時期の特徴をもつものである事から、両者ともに5世紀中葉に近い第3四半期段階の

製品と思われる。

把手付椀や樽型埴は全国的に出土量は少なく、しかも古墳から出土した例も少ない。また、古墳から出土したものうち、主体部から出土する場合より周溝部の方が多いことから、当初は埋葬儀礼に伴って墳丘の周囲で祭祀に使用され、祭祀の終焉とともにそこで使われた祭器を破砕して、周溝部に投棄した風習が存在した可能性を想定できる。やがて、後期の横穴式石室が発達すると、石室内部に完形の須恵器や土師器を副葬すると共に、墓前祭では祭器を打ち欠き廃棄する風習が成立するようになったのではなかろうか。

東山南1号墳出土の把手付椀は、破片が3~4カ所に分かれて出土しており、2号墳の樽型埴は一つの溝中から破碎されて出土していることは、上述の見解を否定するものではない。

ま　と　め

甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園の整備に伴って、計画敷地内の調査が1979年より開始され、既に12年が経過した。今回の東山南（B）遺跡の調査をもって、台地の最上面の調査が終了したわけだが、ここでの成果は極めて大きいものがあった。弥生時代終末から古墳時代初頭に造られた上の平遺跡は100基を越える方形周溝墓群が発見され、その規模は東日本最大級を誇っている。この遺跡の周囲には先土器時代の立石遺跡や、上の平遺跡の縄文時代集落、弥生時代の集落跡である宮の上遺跡が調査されている。更に、古墳時代中墳の低墳丘円墳や方墳のある東山南遺跡、横穴式石室内部から銀象嵌の大刀が出土した稻荷塚古墳などが存在している。風土記の丘の名にふさわしく、各時代の重要な遺跡が展開し充実した様相は、まさに野外博物館そのものである。

これらの多くは公園整備の中で保存され、上の平遺跡の方形周溝墓群のように復元されたものや、稻荷塚のような現況保存、盛り土保存などによって、活用と保存が図られている。今回の東山南遺跡も1・2号墳は整備して保存する方向で検討されている。考察でも述べたように、甲斐国の中古史解明に重要な意味をもつ本古墳が、報告書だけでなく史跡としても大いに活用されるよう望みたい。

最後となりましたが、本調査に関係された調査員・作業員、並びに石和土木事務所の方々に深甚なる感謝を申し上げます。

遺物観察表

1号住居址

番号	器種	法量(cm)	調 整		胎土・焼成・色調	備考
			器体部	底部		
1	弥生 壺	(口) 14.8 (高) 22.2 (底) 7.6	(外)ヘラミガキ、ハケ (内)ハケ	ナデ	(胎)密、長石、金雲母、黒色粒子含む (焼)良好 (色)黄茶褐色	P 3
2	弥生 壺口縁	(口) 17.8	(外)ヘラミガキ、ハケ (内)ヘラミガキ		(胎)密、長石、金雲母含む (焼)良好 (色)灰茶褐色	P 9
3	弥生 壺口縁	(口) 16.4	(外)ヘラミガキ (内)ヘラミガキ		(胎)密、長石、金雲母含む (焼)良好 (色)黄褐色	
4	弥生 胴部破片		(外)ハケ		(胎)密、長石、金雲母含む (焼)良好 (色)黄茶褐色	
5	弥生 壺底部	(底) 8.0		ナデ	(胎)やや粗い、長石、赤色粒子、 3~5mm位の小石含む (焼)良好 (色)茶褐色	
6	弥生 台付壺	(口) 24.5 (高) 31.2 (底) 9.5	(外)ハケ (内)ハケ	ハケ ハケ	(胎)やや粗い、長石、金雲母、黒 雲母含む (焼)良好 (色)黄茶褐色、内面黑色	P 2
7	弥生 台付壺	(口) 11.0 (高) 15.7 (底) 7.2	(外)ハケ (内)ハケ	ハケ ハケ	(胎)密、長石、金雲母、3mm位の 黒色粒子含む (焼)良好 (色)赤茶褐色	P 4
8	弥生 台付壺破片		(外)ハケ (内)ハケ	指頭痕	(胎)密、長石、金雲母、黒雲母含む (焼)良好 (色)赤黄褐色	P 10
9	弥生 台付壺破片	(底) 6.1	(外)ハケ (内)ハケ		(胎)密、長石、金雲母含む (焼)良好 (色)赤茶褐色	
10	弥生 台付壺破片		(外)ハケ (内)ハケ		(胎)密、長石、金雲母、赤色粒子含む (焼)良好 (色)黄茶褐色	
11	弥生 壺口縁	(口) 15.7	(外)ハケ、ミガキ (内)ミガキ		(胎)やや粗い、小石含む (焼)良好 (色)茶褐色	P 8
12	弥生 壺口縁	(口) 15.4	(外)ミガキ (内)ミガキ		(胎)やや粗い、長石、赤色粒子、 3mm位の小石含む (焼)良好 (色)茶褐色	P 8
13	弥生 壺	(口) 7.5 (高) 13.4 (底) 6.3	(外)ナデ (内)ハケ、指頭痕	木葉痕	(胎)密、長石、金雲母含む (焼)良好 (色)赤茶褐色	P 6
14	弥生 瓶	(口) 15.1 (高) 12.5 (底) 5.2	(外)ナデ (内)ハケ		(胎)密、長石、金雲母、茶色粒子含む (焼)良好 (色)赤黄褐色、底部穿孔	P 5

1号墳

番号	器種	法量(cm)	調査		胎土・焼成・色調	備考
			器体部	底部		
1	須恵器 把手付鉢	(口) 8.9 (高) 7.2 (底) 3.7	(外)横ナデ、櫛描波状文 (内)横ナデ	ヘラケズリ	(胎)緻密 (焼)良好 (色)灰褐色	1 3
2	土師壺	(口) 8.8	(外)ヘラミガキ、ナデ		(胎)緻密、赤色粒子含む (焼)良好 (色)茶褐色	1 P 8
3	土師壺	(底) 6.2	(外)ヘラミガキ	ヘラミガキ	(胎)緻密、赤色粒子含む (焼)良好 (色)茶褐色	1 P 8
4	土師壺	(口) 12.2	(外)ヘラミガキ		(胎)密、長石含む (焼)良好 (色)黄茶褐色	2 P 1
5	土師壺	(底) 6.7			(胎)やや粗い、長石含む (焼)良好 (色)黄茶褐色、焼むらあり	2 P 1
6	土師高壺				(胎)やや粗い (焼)良好 (色)茶褐色	
7	土師高壺		(外)ナデ (脚内面)ハケ		(胎)密、長石、赤色粒子含む (焼)良好 (色)赤褐色、焼むらあり	1 P 11
8	土師壺	(口) 13.8 (高) 4.9 (底) 6.2	(外)ヘラミガキ (内)ヘラミガキ	ヘラケズリ	(胎)密、長石含む (焼)良好 (色)茶褐色、焼むらあり	
9	土師壺	(口) 12.3	(外)ナデ (内)ナデ		(胎)密 (焼)良好 (色)茶褐色	1 P 12
10	土師壺	(口) 13.8	(外)ヘラミガキ、ナデ (内)ナデ		(胎)密 (焼)やや不良 (色)黄褐色、焼むらあり	1 P 14
11	土師壺	(口) 13.9 (高) 9.8 (底) 5.6	(外)ミガキ (内)ヘラミガキ、ナデ	ミガキ ナデ	(胎)密、長石、赤石粒子含む (焼)良好 (色)赤茶褐色、内面焼むらあり	1 P 1, 3 6, 底
12	土師壺	(口) 13.4 (高) 7.2 (底) 6.9	(外)ミガキ (内)ヘラミガキ、ナデ	ナデ	(胎)密、長石、2mm位の小石含む (焼)良好 (色)赤茶褐色、焼むらあり	1 P 4 5, 7
13	土師壺 壺口縁破片	(口) 16.4	(外)ナデ (内)ナデ		(胎)粗い、長石、石英多く含む (焼)不良 (色)茶褐色、焼むらあり	3 P 95 97
14	土師壺	(口) 24.7	(外)ナデ (内)ナデ		(胎)密、長石、3mm位の小石含む (焼)良好 (色)茶褐色、焼むらあり	3 P 1
15	土師壺	(口) 26.2	(外)ナデ (内)ナデ		(胎)密、3mm、6mm位の小石含む (焼)良好 (色)茶褐色	3 P 1 7

番号	器種	法量(cm)	調 整		胎土・焼成・色調	備考
			器体部	底部		
16	土師壺	(底) 6.7			(胎)密、長石、金雲母、黒雲母含む (焼)良好 (色)褐色	1
17	土師壺	(底) 6.8			(胎)密、長石含む (焼)良好 (色)黄褐色	1
18	弥生壺	(口) 8.2			(胎)やや粗い (焼)良好 (色)黄褐色	1

2号墳

番号	器種	法量(cm)	調 整		胎土・焼成・色調	備考
			器体部	底部		
1	須恵器 翫	(口) 8.6 (高) 18.9 (底) 20.75	(外)ロクロ横ナデ、波状文 (内)ロクロ横ナデ、指頭痕		(胎)緻密 (焼)良好 (色)黒灰色	2
2	須恵器 翫	(口) 12.2	(外)ナデ		(胎)緻密 (焼)良好 (色)灰色、内外一部黒色、内外一部釉	4 S61 64.66
3	須恵器 2と同一個体					
4	須恵器 2と同一個体					
5	須恵器 翫	(口) 18.7 (高) 20.5 (底) 3.0	(外)波状文、平行タタキ (内)ナデ、指頭痕		(胎)緻密、細砂粒子含む (焼)良好 (色)灰褐色、自然釉付着	4
6	土師 高坏	(口) 15.9 (高) 10.4 (底) 14.15	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ		(胎)緻密、赤色粒子含む (焼)良好 (色)黄茶褐色、焼むらあり	4
7	土師 高坏	(口) 17.85 (高) 9.05 (底) 12.9	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ		(胎)緻密、金雲母、赤色粒子含む (焼)良好 (色)黄茶褐色	4
8	土師 高坏	(口) 18.2	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ		(胎)緻密、赤色粒子含む (焼)良好 (色)黄茶褐色、頸部外に丹塗り	4 H91 96
9	土師 高坏	(底) 11.9	(外)ヨコナデ		(胎)緻密、赤色粒子含む (焼)良好 (色)黄褐色、焼むらあり	4 H89
10	土師 坏	(口) 15.0			(胎)密、長石、石英、赤色粒子含む (焼)良好 (色)赤褐色	2 H1 2
11	土師 坏	(口) 14.8			(胎)密、長石、赤石粒子含む (焼)良好 (色)赤褐色	2 H38 46

番号	器種	法量(cm)	調 整		胎土・焼成・色調	備考
			器体部	底 部		
12	土師 壺	(口) 14.6			(胎)密、長石、石英、2mm位の小石含む (焼)良好 (色)赤褐色	2 H16 28,29
13	土師 壺	(口) 12.2			(胎)密、長石、赤色粒子含む (焼)良好 (色)赤褐色	2 H17 19
14	土師 小型壺	(口) 8.8			(胎)緻密、長石、赤色粒子含む (焼)良好 (色)茶褐色	4 H72
15	土師 壺	(口) 16.0			(胎)粗い、長石、石英多く含む (焼)やや不良 (色)茶褐色	1
16	土師 壺	(口) 13.4			(胎)粗い、長石、石英多く含む (焼)良好 (色)茶褐色	1
17	土師 壺	(底) 7.5			(胎)粗い、砂、9mm位の小石含む (焼)良好 (色)茶褐色、焼むらあり	1
18	土師 壺	(底) 5.7	(外)ナデ (内)ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	(胎)密、長石、赤色粒子含む (焼)良好 (色)茶褐色、焼むらあり	2 H12
19	土師 壺	(底) 5.8	(外)ヘラミガキ	ヘラミガキ	(胎)密、長石含む (焼)良好 (色)褐色、焼むらあり	4 H103
20	土師 壺	(底) 6.1	(外)ハケ (内)ヘラミガキ		(胎)やや粗い、長石、石英含む (焼)良好 (色)褐色	2 H10

発掘調査前



1号住居址
調査風景

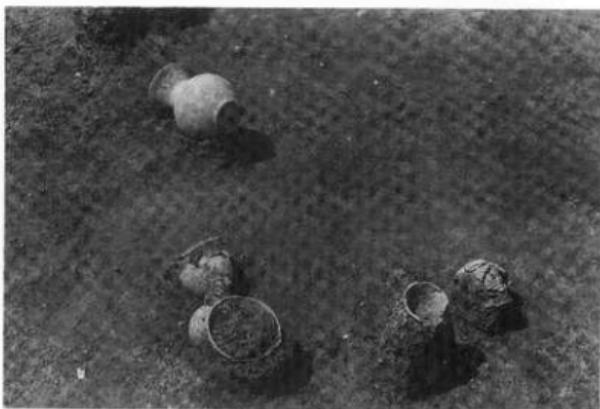


1号住居址
遺物出土状態

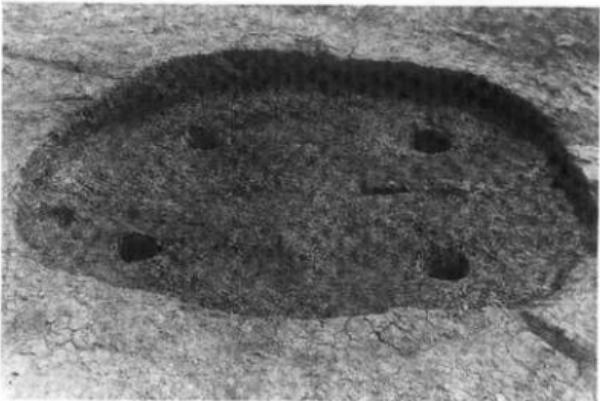




1號住居址
遺物出土狀態



1號住居址
遺物出土狀態

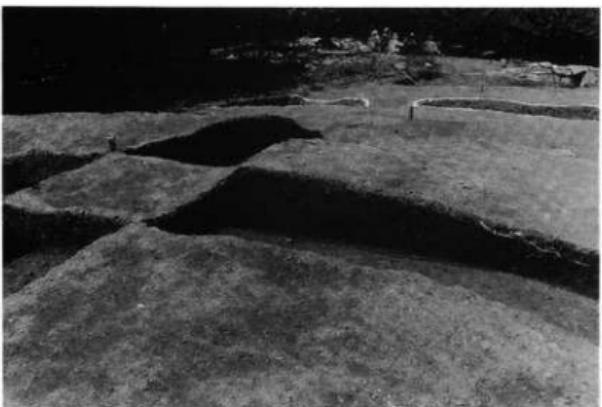


1號住居址
全　　景

I 填丘 調査 噴景



I 填丘 噴景



I 填丘 噴景
1 手付状
(周溝) 1)





1号墳周溝1
セクション



1号墳周溝2
セクション



1号墳有孔砾石
出土状態
(周溝1)

1号墳周溝1
遺物出土状態

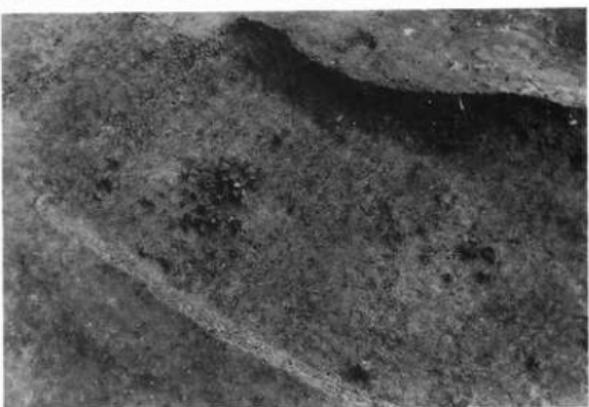
1号墳周溝1
遺物出土狀態



1号墳周溝2
遺物出土狀態



1号墳周溝3
遺物出土狀態





2号墳周溝3
セクション



2号墳周溝4
セクション



2号墳梯型起
出土状態
(周溝2)

2号墳
調査風景



2号墳
周溝2
出土状態



2号墳
周溝1
遺物出土状態





2号填周溝4
遺物出土狀態

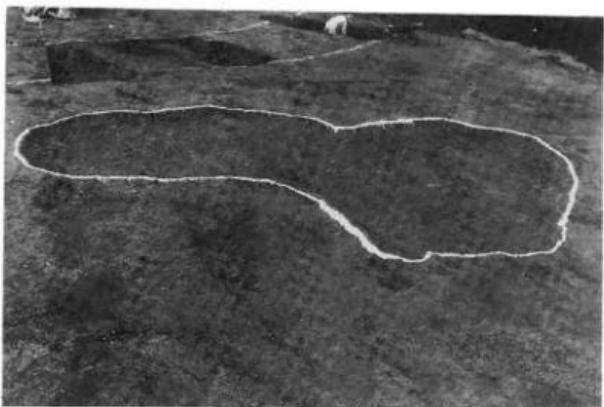


2号填周溝4
遺物出土狀態



2号填周溝4
遺物出土狀態

堅穴道構景全



堅穴道構景全

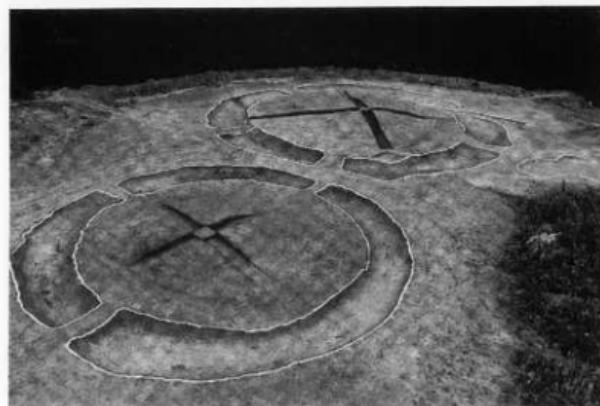


堅穴道構遺物出土狀態

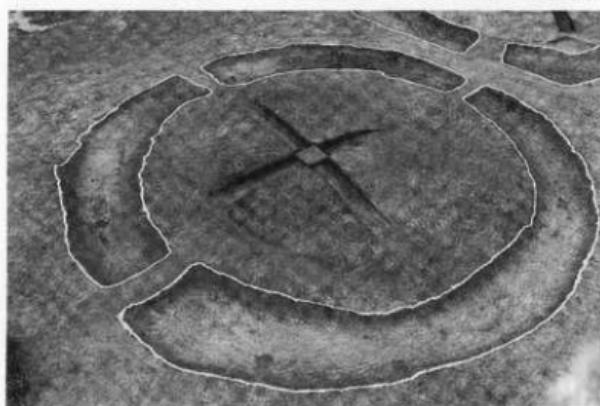




1989年度
調査終了写真



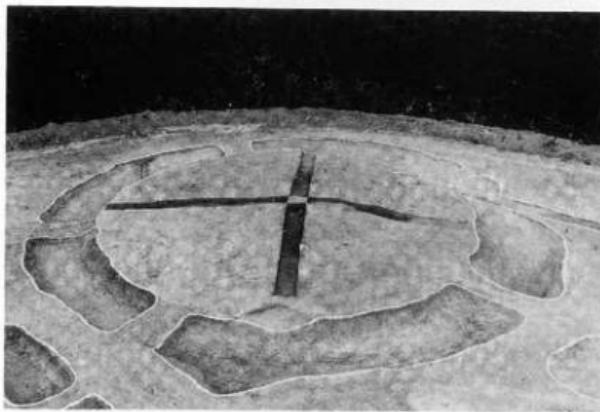
1990年度
調査終了写真



1号墳全景



(下)
2号 墓 全景





1号墳周溝
冠水状況



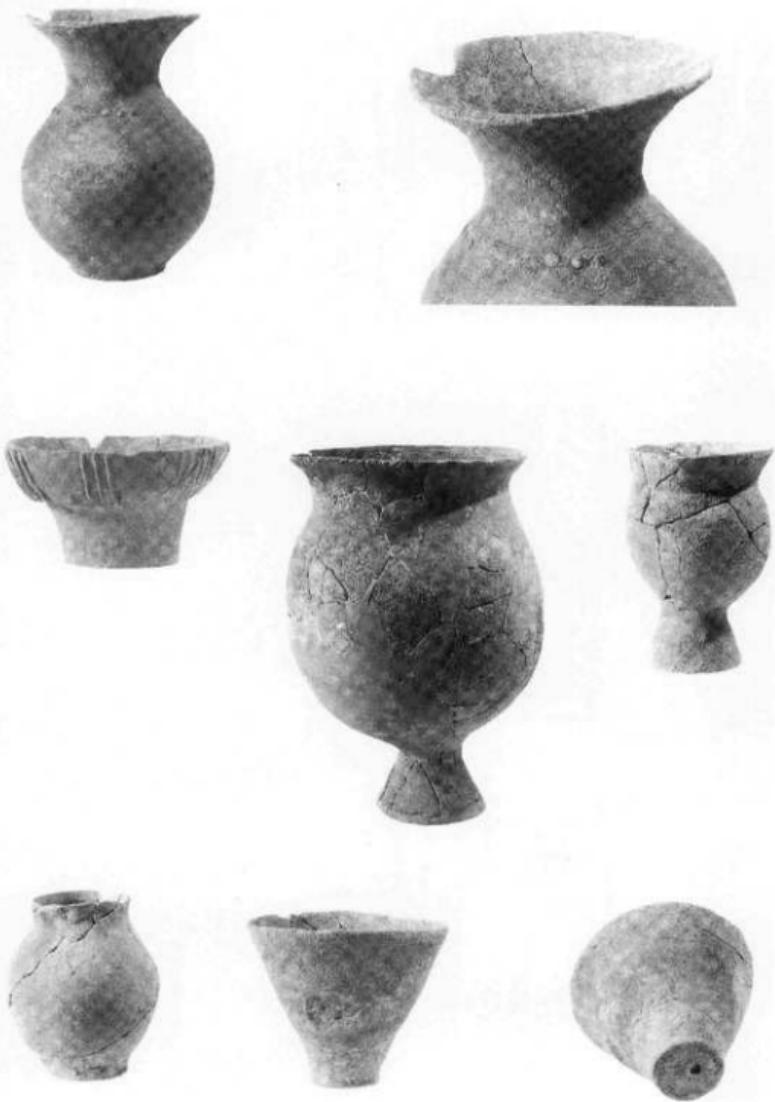
大丸山古墳



1号溝
及び土坑



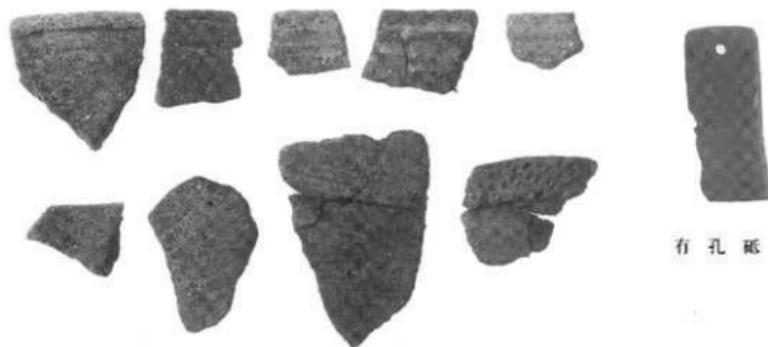
航空写真



1号住居址出土遺物



須恵器把手付椀



有孔砥石

縄文時代晚期～弥生時代前期の土器片



メノウ原石

1号墳出土遺物



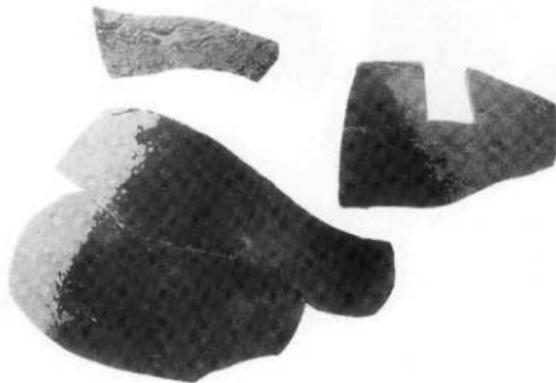
須惠器 袋



須惠器 槌型埴



須惠器 袋 口 緑



須
惠
破
器
片

2号墳出土遺物

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第64集

甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園

東山南（B）遺跡

印刷 平成3年3月25日

発行 平成3年3月30日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 0552-66-3881

発行 山梨県教育委員会

印刷 (有)新星堂印刷

